市立大町山岳博物館　企画展

播隆・槍への道程

―善の綱をたどれば―

主　催：市立大町山岳博物館
会　期：平成17年6月4日～8月21日
会　場：市立大町山岳博物館　特別展示室・ホール

市立大町山岳博物館　企画展

播隆・槍への道程

—善の綱をたどれば—

市立大町山岳博物館

市立大町山岳博物館　企画展

播隆（ばんりゅう）・槍（やり）への道程（みちのり）　―善（ぜん）の綱（つな）をたどれば―

■主　　催　　市立大町山岳博物館
■監修・協力　　ネットワーク播隆代表・黒野こうき
■後　　援　　信濃毎日新聞社　朝日新聞松本支局　中日新聞社
　　讀賣新聞松本支局　毎日新聞松本支局　産經新聞社長野支局
　　大糸タイムス株式会社　民友信州　市民タイムス　ＦＭ長野
　　ＳＢＣ信越放送　ＮＢＳ長野放送　（株）テレビ信州　長野朝日放送（株）
　　アルプスケーブルビジョン（株）　大町市有線放送電話農協
■会　　期　　平成１７年６月４日（土）～８月２１日（日）
　　（６月６・１３・２０・２７日の月曜日は休館）
■開館時間　　午前９時～午後５時（入館は午後４時３０分まで）
■会　　場　　市立大町山岳博物館　特別展示室・ホール
■観覧料　　大人４００円　高校生３００円　小・中学生２００円
　　※常設展と共通、３０名様以上の団体は各５０円割引
　　そのほかの各種割引については窓口でお問い合わせください

（敬称略）

・表　紙　槍ヶ岳※
　　播隆肖像画　播隆上人六字名号御影軸（岐阜県可児市兼山）一部※
・裏表紙　播隆上人六字名号軸（長野県松本市　玄向寺蔵）の署名・花押※
・扉写真　播隆上人所持「錫杖」（岐阜県揖斐郡揖斐川町　一心寺蔵）※

※撮影・提供　黒野こうき氏

目　　次

ごあいさつ

山岳文化都市宣言

解　　説　　念仏行者・播隆 ―人と足跡―／黒野こうき …… 6
　　飛州新道 ―槍への通い道―／降旗　正幸 …… 8
　　播隆とその時代／布川　欣一 …… 10

特別寄稿　　私の播隆研究／穂苅　貞雄 …… 12

播隆関係史跡等紹介 …… 13

展示構成 …… 21

展示資料図版 …… 22

展示資料目録・資料解説 …… 26

播隆年譜 …… 32

主要参考文献 …… 35

（敬称略）

凡例

1．本書は市立大町山岳博物館において、平成１７年６月４日（日）から８月２１日（日）まで開催される企画展「播隆・槍への道程　―善の綱をたどれば―」の展示解説書である。
2．写真および図版に付した番号は展示写真パネルや展示資料の解説プレートの番号と共通するが、必ずしも展示の順序を示すものではない。
3．資料名称は原則として所蔵先の呼称によるが、一部統一を図るために変更した。
4．会期中、一部展示替えを行なう。
5．企画展の企画にはネットワーク播隆代表・黒野こうき氏より協力を得て、企画展全体および本書の監修をしていただいた。
6．企画展の企画は当館館長・柳澤昭夫、副館長・宮野典夫、主事・勝山直人、学芸員・清水博文、千葉悟志、関悟志による。なお、企画展および本書の編集、播隆関係史跡等紹介ならび展示資料解説の執筆は関が担当した。

ごあいさつ

当館は昭和26年（1951）の開館以来、「山岳」をテーマにした博物館として、北アルプスの自然や登山の歴史を広く紹介する活動を行なっております。大町市は北アルプスの後立山連峰を中心として北は五龍岳から南は槍ヶ岳の山頂までを市内に含み、これら山々への登山口にあたる「岳都（がくと）」です。

平成14年（2002）、大町市は「山岳文化都市宣言」を行ないました。「環境の世紀」といわれる21世紀にふさわしい山岳文化の発展と創造をめざし、自然と人とが共生する町づくりを進めております。

岳都・山岳文化都市を自負する大町市と当館にとって、槍ヶ岳の登山史は地域文化をさぐる上でも欠くことのできないテーマであります。

このたび、当館の平成17年度企画展として、播隆（ばんりゅう）上人と槍ヶ岳開山をテーマにした企画展を開催する運びとなりました。

槍の穂先のように鋭く尖った山頂部をもつ槍ヶ岳（3,180m）は遠くからでもすぐにそれとわかり、北アルプスを象徴する山の代表格です。

槍ヶ岳は江戸後期の文政11（1828）年、念仏行者・播隆によって開山されました。播隆は合計5回にわたる槍ヶ岳登山で、山頂に仏像を安置するだけではなく、山頂付近の岩壁に藁縄（わらなわ）と木製の鈎（かぎ）で作った「善（ぜん）の綱（つな）」（後により丈夫な鉄鎖にかけかえられる）を取りつけ、後につづく登拝者の安全を図りました。これは、「日本アルプス」の名を世界に紹介した英国人宣教師ウォルター・ウェストンによる槍ヶ岳登頂に先立つこと66年前のことです。明治時代にはじまった日本の近代登山以前、播隆に導かれた多くの日本人が槍ヶ岳山頂に登拝していたのでした。

当時、なぜ播隆とその弟子や講中の人びとは高く険しい槍ヶ岳の頂上まで歩を進めたのでしょうか。

本展は「第1部　念仏行者・播隆　―人と足跡―」「第2部　播隆の槍ヶ岳開山」「第3部　播隆研究アラカルト」の3部からなり、槍ヶ岳への善の綱設置にいたるまでの過程を、山登りの道程でいう何合目にあたるかにたとえて展示を構成しています。

ここではネットワーク播隆代表・黒野こうき氏の監修・協力を得て、岐阜・富山・長野県などに現存する播隆関係資料を展示し、槍ヶ岳開山に込められた人びとの思いを探るとともに、日本の近代登山以前、国内における登山の一面を紹介します。

本展の開催にあたり、貴重な資料をご出品いただきました所蔵者の皆様ならびにご協力いただきました関係各位に対し、厚く御礼申しあげます。

平成17年6月4日

市立大町山岳博物館

山岳文化都市宣言

私たちの大町市は、雄大な北アルプスのパノラマを代表とする、四季折々の変化に富んだ豊かで美しい大自然に恵まれています。

北アルプスの山麓で生まれ、育ってきた市民は、その長い歴史を通じて、山岳がもたらす豊かな自然環境の恵みを受けながら、自然と人とが共生する独自の山岳文化を形成してきました。

私たちは、先人たちが守り育ててきた山岳文化を受け継ぎ、かけがえのない豊かで美しい自然を次の世代に伝えていかなければなりません。

21世紀を迎えた今日、身近な生活環境の改善から地球環境の保全まで、様々な環境問題への取り組みが重視される中で、本市においても、市民、事業者、行政等が協働と連携を図りながら、新しい時代の課題や要求に応える山岳文化の振興が求められています。

本市における山岳文化の拠点である山岳博物館開館50周年の節目にあたり、山岳博物館創設当時の理念に学びながら、「環境の世紀」と言われる21世紀にふさわしい山岳文化の発展と創造をめざして、大町市を自然と人とが共生する「山岳文化都市」とすることを宣言します。

平成14年3月15日

大　町　市

解　説

念仏行者・播隆 —人と足跡—

黒　野　こうき

出生から巡錫

播隆は江戸時代の後期、天明6年（1786）に越中国新川郡河内村（現富山県富山市、旧上新川郡大山町河内）中村佐右衛門（順信）の二男・女の次男として生れた（兄・隆観、姉・さき。母親の戒名は遺されるが名前はわからない）。生家は代々浄土真宗の道場（寺院の代わりをした家）をつとめた信仰の篤い家柄であった。

十代のある時期にふるさとを出た播隆は、大坂あるいは京都で宗教遍歴をしたようで、文化元年（1804）、19歳のときに尾張国の浄土宗尋盛寺（名古屋市千種区城山）の性誉上人に弟子入りした。その間の詳しいことは不詳だが、和州阿辺ヶ峰の見仏上人の弟子となって仏岩とも称した。文化11年（1814）、播隆29歳のときに浄土宗開東十八檀林のひとつであった江戸本所の霊山寺（東京都墨田区横川）で正式な僧となった。また、文政元年（1818）の33歳のころには山城国伏見の一念寺（京都市伏見区下鳥羽）の蝎誉上人のもとで修行をしていたようである。

求道に燃えた播隆は、安泰をむさぼる当時の寺院仏教になじめず、修行の場を山岳に求めた。生家に遺される播隆の書簡、手記には厳しく諸宗を批判しており、播隆の真摯な信仰心を読み取ることができる。

伊吹山修行

山野、深山幽谷に修行の場を求めた播隆は、伊吹山での山籠修行、文政6年には笠ヶ岳再興を成す。そのほかにも南宮山奥の院（岐阜県垂井町）、杓子の岩屋（岐阜県高山市）、伊木山（岐阜県各務原市）、迫間不動（岐阜県関市）など各地の岩屋、修行場で修行しており、厳しい戒律を守りながら死ぬまで修行僧でありつづけた。その修行は激しく、伊吹山山籠のときすでに多くの人びとがそんな播隆のもとに参集している。

伊吹山山籠での足跡は濃く、岐阜県揖斐川町の開山寺院・一心寺、岐阜市の開山寺院・正道院、美濃、尾張に今も遺される播隆念仏講（播隆の名号軸を囲んで勤める講）などに播隆の教化の面影をしのぶことができる。

念仏行者としての播隆　—播隆の足跡—

播隆は念仏の行者であったが修行のあいまに多くの書き物、記録を遺した。「諸宗皆祖念仏正義論」「無常歌」「念仏起請文」「濃州一宮南宮奥院山籠記」「迦多賀嶽再興記」など、参集した人たちに教えをわかりやすく説いた刷物を配っている。

念仏修行の途上に笠ヶ岳再興、槍ヶ岳開山、穂高岳登頂といった山岳史上の輝かしい功績を遺した播隆であったが、反面、播隆は積極的に里の人たちと交流した。山を下りた播隆は精力的に各地を巡錫し念仏を広めた。里の播隆の活躍はめざましく、各地に遺される播隆名号碑は現在80基が確認され、播隆名号軸、歌軸などの墨跡は約150幅余り、確認された現在も勤められている播隆念仏講および播隆関連の念仏行事は25ヶ所ほどある。それらの調査で聞かせていただいた伝承などから、山の播隆を支えていたのは里の播隆であり、播隆に帰依した多くの里人たちなのであった。

笠ヶ岳再興

飛騨の上宝村（現岐阜県高山市）にやってきた播隆は杓子の岩屋に籠もり、地元の本覚寺の椿宗、里人らとともに笠ヶ岳の再興を成す。播隆はこのとき御来迎を拝し（ブロッケン現象）、岩屋を発心の地と定め、再興した登山道に一里ごとに石仏を配置、山頂に上品上阿弥陀仏を安置、笠ヶ岳そのものを浄刹九品の蓮葉台とした。すなわち笠ヶ岳の山体が御来迎で現れる阿弥陀如来の台座となる。登拝信仰するものにとって山頂でブロッケンに出会うことは仏の実現なのである。のちに槍ヶ岳開山と進む播隆にとって、笠ヶ岳で拝した御来迎は登拝信仰の確立であり大きな支えとなった。

笠ヶ岳再興を成した播隆はいったん伊吹山に帰る。播隆がいつから伊吹山山籠修行に入ったのか定かではないが、文政7、8、9年にかけて伊吹山で修行したことは春日村の川合区有文書（揖斐川町）、関ヶ原町の奥田家文書などで知れる。

播隆の槍ヶ岳開山

信州松本と飛騨高山を最短距離で結ぶ中尾峠越えの飛州新道は、安曇郡岩岡村（現長野県松本市）の庄屋・岩岡家三代にわたる計画で、文政3年に着工され天保6年（1835）に完成する。笠ヶ岳再興のときにはすでに飛州新道が信州側で着工されており、槍ヶ岳をめざした播隆は三郷村小倉の中田又重を訪ね、又重の案内ですでに一部完成していた飛州新道を利用し、文政9年に第1回目の槍ヶ岳登拝を成し（初登頂）、その後は播隆窟（坊主の岩屋）で修行し下山。2年後の同11年には槍ヶ岳の山頂に阿弥陀仏などの三尊を安置して槍ヶ岳開山を成す。そのとき穂高岳には名号碑を安置している。

その後、天保4、5、6年にも登り、播隆は槍ヶ岳登拝修行を5回行なっている。播隆は開山ということばを使わずに開闢といっており、その目的が達成されたのは4回目の天保5年のことであった。山頂を広げ、先に安置した三尊に新たに釈迦如来を加えて四尊として鎗ヶ嶽寿命神とした。そして槍の穂先に藁で作った「善の綱」をかけた。善の綱とは仏と仏縁を結ぶ綱のことで、善の綱をたどって槍の山頂に立ち、そこで御来迎を拝せばまさに阿弥陀を目のあたりとし仏を実感することになる。

播隆にとって槍ヶ岳はまず修行の場であり、槍ヶ岳を開闢し、里で槍ヶ岳念仏講を組織して多くの人を槍の山頂に導くのが目的であった。松本市の玄向寺には御来迎を拝したようすを記した「三昧発得記」が遺されており、三郷村には播隆の動静が詳しく記された「務台家文書」がある。務台家文書によれば播隆は槍ヶ岳に2ヶ月余りも山籠したことがあり、美濃の信者が槍ヶ岳に登拝したことが記され、上高地では畑作の試みがなされ湯屋もあった。また、藁で作られた善の綱を鉄鎖にするために「信州鎗嶽畧縁起」が刷られて広く配布され、たちまちのうちに浄財が集り鉄鎖が信州に運びこまれた。しかし、ときあたかも天保の飢饉、あらぬ風評によって鉄鎖は松本藩に差し押えられてしまう。

天保11年、飢饉もおさまり弟子や信者らの協力で鉄鎖が槍の穂先にかけられた。そのとき病に伏していた播隆は大願成就の報を玄向寺で聞いた。小康を得て播隆は美濃国にむかい、同年10月21日に中山道太田宿（岐阜県美濃加茂市）の脇本陣・林家で大往生、行年55歳であった。

播隆の生涯を槍ヶ岳開山物語だけで語ることはできない。念仏行者・播隆はつねに民衆とともに生きその幸せを願った。庶民の中で信仰を実践した民間宗教者の大きな流れがあるが、そんな近世の聖の一人として播隆を語りたい。

（ネットワーク播隆代表、円空・播隆研究家、画家）

解　説

飛州新道 —槍への通い道—

降 旗 正 幸

槍ヶ岳登山と飛州新道

播隆が槍ヶ岳を開山し万人の念仏の場とするよう努めていたころ、信州と飛騨を結ぶ古道を改善し、交易の道として開かれたのが「飛州新道」である。信州安曇郡小倉村（現長野県南安曇郡三郷村）から山越えし、上高地経由で中尾峠を越え飛州吉城郡中尾村（現岐阜県高山市奥飛騨温泉郷中尾）に至る道筋である。

飛州新道を、登山のための道として初めて利用したのは、播隆と案内役の小倉村又重である。播隆は、文政9年（1826）以来5回槍ヶ岳山頂に立っているが、いつも又重を同行し小倉村を基地とし、大滝山稜線近くの小滝まではこの新道を登った。播隆と又重にとり、飛州新道は槍ヶ岳への通い道であった。

この道は、文政7年には上高地までは開いていたから、大滝山までの道は幅広い道であった。当時の登り口には、今も播隆が祈願したと言われる大日堂があり、播隆の六字名号碑（ろくじみょうごうひ）が後になり建立されている。

播隆と又重の登山ルート

又重と播隆は小滝で飛州新道に分かれ、槍ヶ岳道に入っている。天保6年（1835）、播隆の後を辿り槍ヶ岳に登った野沢村（現南安曇郡三郷村）庄屋景邦の山行記には、「はなはだ細く知れがたき分かれ道」とある。稜線に出て北に向かい蝶ヶ岳を越え、「大嶮難所熊倉沢の坂落とし」を下り「沢多きをしのぎ」梓川に出て槍沢を詰めている。玄向寺（松本市大村）門前のなた鎌持ちの播隆像は、槍ヶ岳山行最大の難所熊倉沢下りの姿である。昭和29年（1954）刊（昭和49年修正）「南安曇郡地方図（郡図）」（南安曇郡誌編纂会編）によると熊倉沢はワサビ沢ではない。

「新道町間改帳」（天保6年）によると、飛州新道は小滝で道を左（南）にとり、大滝山を巻いて徳本峠につながる尾根道を辿る。小滝から1里半ほどで百まがり（現大滝槍見台辺）に出る。さらに1里ほどで（曲り沢下り徳沢か）上高地上に当る古池へ出る。廃道となった大滝山荘西裏の徳沢上流へ一気に下る道が飛州新道とされてきたが、改帳と照合踏査の結果、異なることが明らかとなった。鍋冠山辺も、現在は鍋冠山頂を越えて大久保（八丁だるみ）に至るが、当時は南を巻き地名の消滅した「富士見横手」を経て大久保に出ている。天保6年冬、播隆が小屋掛に失敗し足の指を凍傷で失った「牛首」も、冷沢であることが判明した。

天保5年（1834）に、播隆一行により山頂登攀用の補助綱「善の綱（ぜんつな）」が掛けられてからは、播隆の信徒はじめ、遠くは美濃国の人なども、この道を辿り槍ヶ岳に登っている。天保11年（1840）、鉄鎖を背にした大勢の播隆の信徒たちがこの道を登り、善の綱を掛け替えて恒久的なものとしている。飛州新道は、播隆の仲間にとっても槍ヶ岳への通い道となっていた。

飛州新道の成り立ち

それまで用いられていた飛州往来新道・飛州山越え新道などが衣替えし、「飛州新道」となるのは、天保6年、新道が中尾村まで全通してからである。小倉・中尾間の古道は全面6尺に拡幅、急坂はゆるやかに、沢には橋が架けられ、荷負いの牛馬も無理なく通れるようになった。小倉村の登り口も付け替えられ、登り口には番所や問屋も設けられて、交易の道が誕生した。

新道開削関係者は、あえて「往来」の二字を省き「飛州新道」と公用文書に用いるようになっている。

「飛州」は、梓川谷入りを飛騨往来、それ以外を飛州往来とする松本領古来の習慣に従ったに過ぎない。「新道」には、新規開削の意味もあるが、古道に対する新道の意味が強い。中尾峠には鎌倉みち、大滝山には抜け道があり、いずれにも古道かち（徒歩）道があった。「飛州新道」の全通は、信飛両国の16年目の心の結集の成果であり、世紀の扉を開く信飛両国直行の大型輸送路の開通であった。新道関係者には、人知れぬ「新道」への深い思い入れがあった。

岩岡村庄屋三代の念願

交易の道「飛州新道」の発想・開削・維持には、安曇郡岩岡村（現松本市梓川）庄屋三代が深くかかわっていた。「往き荷は飛騨に不足している米、帰りには信州にない海産物」と交易の道を説いたのは、心学者でもあった勘左衛門英信（かんざえもんてるのぶ）と伝えられている。寛政2年（1790）の平湯番所の閉鎖により野麦峠通りの遠回りを強いられていた信飛両国にとり、期待の夢の道提唱であった。

待つこと久しく新道開削の機の熟したのは、文化13年（1816）に安曇野を横切る拾ヶ堰が開削され、6百余町の田に水が潤い、増石が見込まれるようになってからである。英信の志を継承し、新道開発に着手したのは、英信の孫分にあたる伴次郎英総（ばんじろうてるとし）である。英総が、一気に飛州まで開道すべく着工したのは、文政3年（1820）10月のことである。

着工はしたが、飛騨側の村方の協力や幕府領高山支配所の許可が得られず、やむなく道筋は中尾峠越えに、工事も2期施工に変更となった。大滝山越え上高地を第1期、上高地から中尾峠越えを第2期とした。

第1期工事は、着工4年後の文政7年夏までには、上高地まで開通させることができた。この区間の工事に当たり、庄屋役として多忙な伴次郎英総に代わり、飛騨側や藩庁との折衝や、工事現場の責任者として工事の指揮監督に当ったのが、後に播隆の山案内人を務める小倉村の又重である。

第2期工事の着工は、上高地開道10年後の天保6年の閏7月である。小倉村又重は本郷（現高山市上宝町）の本覚寺住職椿宗（ちんじゅう）を頼り、高山郡代大井帯刀（たてわき）を動かすよう依頼し、これが決め手となった。播隆も笠ヶ岳中興に当たり椿宗を頼っている。奇しくも両者は、苦境にあたって共に椿宗の力を得ている。第2期工事は、着工1ヶ月後の8月20日には供用開始となっている。

念願の道「飛州新道」が全通、天保12年には徳本峠越え新道冬道も改修され、伴次郎らの初期の狙いからすると盛んな往来が期待されたはずであった。ところがこの新道には、思わぬ落とし穴があった。人家が少なく荷継ぎができない道、冬期間は通行できない道、道型や橋が破損しやすい道であった。

安政6年（1859）5月19日、新道の維持管理に当たっていた英総の息子勘左衛門英勝を、唖然とされる事態が発生した。大雨により徳本峠越え冬道はじめ、いたる所が崩落、徒歩での通行でさえ困難な道になってしまった。結果的にこの日が、信飛直行大型輸送路「飛州新道」の最後の日となった。英勝は、文久元年（1861）8月、「新道切寒ぎ願書」を提出し、開道26年目にして「飛州新道」は閉鎖となった。

平成の安房トンネルの開通により、伴次郎らの夢は再現され、夢の道は現実となった。

（郷土史研究家）

解　説

播隆とその時代

布　川　欣　一

文化・文政期の幕政と社会

播隆は天明6年（1786）に生まれ、天保11年（1840）に入寂した。これを幕府体制に照らすと、第11代将軍・徳川家斉（いえなり）の治世いわゆる大御所時代にぴったり重なる。家斉は播隆生誕の翌年に将軍となり、天保8年、家慶（いえよし）にそれを譲るが、播隆入寂の翌年に没するまで大御所として幕政を牛耳った。

一揆や騒擾（そうじょう）を抱えつつも「徳川による平和」は続く。しかし幕藩体制に動揺・衰退の色は濃い。家斉が将軍就任の年に老中首座に任じた松平定信は、寛政の改革に当るが確かな成果を挙げえぬまま、寛政5年(1793)、老中を辞す。だが家斉は、享保・文化・文政から天保期まで将軍職に居座り、豪奢な生活に耽（ふけ）る。幕政が無気力と腐敗に堕す鎖国日本に外圧がかかる。ロシアや英・米艦船が来航を重ね通商を求めるのである。家慶は家斉没の直後、老中・水野忠邦に天保の改革を担わせるが、幕藩体制の危機的状況はさらに深まる。

半世紀に及んだ家斉の治世は、寛政・天保両改革に挟まれる。その中心に位置する時代が文化・文政期(1804～30）で、まさにこの時期、播隆は仏門に入って修行を重ね、笠ヶ岳を再興し槍ヶ岳を開山した。

統治者の支配が揺らぐとき、民衆は多様な願望を臆せず顕わにし、蓄えた力量を存分に揮（ふる）う。文化・文政期は、社会のさまざまな分野で活況と流動、繁栄と荒廃とが交錯した時代として特色づけられる。とりわけ、江戸の経済と文化の分野で変貌が著しかった。

関東一円の新田開発、河川舟航網整備や各種加工業、問屋層の成長などにより「江戸地回り経済」圏が形成された。江戸は京大坂の「下り荷」依存を脱して経済的自立を果たし、政治都市に加えて商業都市の性格を強める。近隣農村には「作間稼」が盛行し、貨幣経済がより濃密に浸透して農民層に流動化現象をもたらす。それは、活況の一方に荒廃を生み出し、国定忠治や飯岡助五郎・笹川繁蔵らアウトロー登場の素地ともなっていく。幕府は、関東取締出役や組合村を設けるなどして、これに対処した。

江戸は、幕府・各藩お抱えの武士、全国各地から流入して諸業に就く庶民ら百万人が居住する巨大都市であった。その文化・文政期、文人・画家・俳優らが多く居を構え、江戸に根づく文化は最高潮に至る。大江戸文化といわれ、粋（いき）や通（つう）など独特の美意識を育て、極だって大衆的な特徴を具えた。見世物・寄席・芝居などの盛り場が栄え、遊芸・園芸や地方風物に材を採る道中記・浮世絵が流布する。爛熟・頽廃の色濃いこの江戸風文化は、旅の盛行にのってたちまち各地へ伝播した。

山岳信仰と霊山登拝の状況

鎮守の森に囲まれ丘や里山を背に建つ神社――各地にみられるこの風景は、その起原を縄文時代まで遡る日本人の山岳信仰のあり様を今に伝えている。山や森は、命の糧をもたらす恵みの神、また荒ぶる神や妖怪変化、祖霊の住まう聖域で、感謝と畏怖と崇敬の対象であった。人びとは踏み入るのを憚（はばか）り、山麓に神として祀り祭礼を欠かさなかった。

一方、山岳崇拝を進めて神との一体化を求め、山中で厳しい修行を積む者（修験）が現われる。彼らは体得した験力によって神と里人との仲介役を担い、人びとの尊敬を集めた。大和・奈良・平安と時代が進むにつれ、原初的な山岳信仰は仏教や道教に強く影響されて、教理と体制を整える。役小角（えんのおづぬ）を開祖に仕立てた修験道、最澄・空海を開祖とする山岳密教が成立し、日本各地で多くの山岳が宗教的に開山された。

神仏習合の各山社寺は戦乱の時代後、「徳川による平和」のもと、民衆の霊山登拝で賑わう。とりわけ

富士山・立山・白山が三大霊場の地位を確立して各地に信者の講を組織し、他もこれに倣う。文化・文政期は富士講登山の最盛期で、江戸に八百八講、関八州のそれを合して信者10万を擁したという。文化13年（1816）には、甲斐（山梨県）側吉田口、駿河（静岡県）側3つの登山口を合わせて、ともに8千人ずつが登ったとの記録も残る。東北の出羽三山では、関西から船を仕立てた酒田港経由の信者らが登拝路に連なり、文化14年に2万7千、文政2年（1819）に1万8千と『出羽三山史』は記す。伊勢神宮「おかげ参り」の熱狂が最高潮に達したのは文政13年、500万もの群衆が伊勢を目ざした。

この時期に盛行をみた伊勢神宮・金毘羅宮・善光寺・東照宮などの参詣にも、四国・秩父などの巡礼にも、他の霊山登拝にも、京大坂や江戸見物、精進落しと称する遊里入りなどを加えて物見遊山・遊興の傾向が顕著である。民衆のあいだに、日常の生活空間を脱して外界に遊び、広く未知領域へ歩み入りたい強い願望や関心が高まった証左であろう。文化・文政期は、一定程度にせよ、これを可能とする経済的、社会的条件が整った時代であった。

信濃各地の開山と山岳信仰

「徳川による平和」は、けっして民衆生活を安んじはしなかった。家斉治世の美濃でも飛騨でも信濃でも、他地域と同様、百姓一揆や騒擾は止まなかった。たとえば播隆槍ヶ岳開山3年前の文政8年（1825）、美濃川西地方に長森騒動、信濃安曇地方に赤蓑騒動が起きた。赤蓑騒動は、麻の買叩き、凶作に乗じた富農商による米の買占めに抗する行動で、小谷村に発し、大町を席捲して穂高組に至る広範囲に及び、3万人が決起した。播隆の開山は、こうした、生活苦に喘ぎ不満の鬱積する民衆の心情に添い、彼らの信頼を集め、それゆえ、彼らに支えられた祈りの行であった。

播隆前後にも、衆望を担う聖らによる命がけの開山が相次ぐ。富士講中興の祖・身禄が吉田口七合五勺の烏帽子岩で自ら入定したのは享保18年（1733）、それが文化・文政期の富士講隆盛を導く。その富士へ、天保3年、小谷三志が高山たつを登頂させ女人禁制へ風穴をあける。

信濃の木曽御嶽では、天明5年（1785）、覚明が無精進の信徒と登拝を試みて代官所に制止されるが、没後、軽精進の登拝が認められる。その寛政4年（1792）、普寛は未踏の王滝口から登拝路を開き、越後・八海山、上州・武尊山をも開山する。文化13年、諏訪の延命が黒戸尾根から甲斐駒ヶ岳を開くが、3年後の開山日に入寂を記す墓碑が茅野に残る。自ら入定したと目される。信濃富士とも呼ばれる有明山――神話・伝説の舞台となり東麓に有明神社奥社を祀るが、開山は享保6年（1721）で、宥快と氏子らによる。以来、修験らの登拝が続く。乗鞍岳頂稜は、信濃・飛騨両山麓農民にとって雨乞いの場だった。延宝8年（1680）に円空が登頂。両山腹に鉱山開発後、文政2年に信濃側から、同8年に飛騨側から、修験者の登拝・修行の記録が残る。

白馬岳など後立山一帯は、17世紀半ば以降、越中側から加賀藩黒部奥山廻役が見分登頂を重ねて俗界とし、御縮山として民衆の入山を禁じた。しかし、その雪形を農事暦とした信州側山麓農民の「岳」信仰は篤い。小蓮華山に山麓・千国の源長寺開祖・洞光が大日如来を祀り、享和元年（1801）に再祀される。大日岳とも呼ばれる所以である。また、「岳」から吹きおろす強風の鎮静を願う風切地蔵が天狗・遠見・八方の各尾根に、地蔵が天狗池や三国境などにも祀られている。

大町から望める蓮華岳の頂上西方には、大町の若一王子神社奥宮の祠が建つ。

（登山史研究家）

特別寄稿

私の播隆研究

穂　苅　貞　雄

父・三寿雄（みすお）が槍ヶ岳山荘創立40周年記念として『槍岳開祖播隆』を私家版で出版したのは昭和38年（1963）であった。父は戦後間もなく体調を崩し、長年続けていた播隆の取材は滞りがちであったが、私が昭和29年より父の跡を継ぎ山小屋を経営するようになると、播隆の取材調査はもっぱら私の仕事となった。

昭和30年代はあたかも登山ブームとなり、大勢の若者たちが登山をして小さい山小屋へ殺到したので、その対応に追われ、私はほとんど毎年山小屋の増改築をしなければならず超多忙の日々であった。登山シーズンが終わり下山すると早速、父の命により播隆の取材にカメラを持ち出かけねばならなかった。当時コピー機がないので、古文書などはカメラで複写し白黒写真に拡大して父に渡さねばならなかった。

若年であった私はいやいやながら父の命に従っていたが、取材を重ねているうちに、いつの間にか念仏行者播隆の魅力に取りつかれてしまい、しかも年を経るごとにそれは大きくなるばかりであった。富山の播隆生家・中村家や岐阜の播隆が開山の播隆院・心寺には、たびたび泊めていただいて古文書などを複写したことがなつかしく思い出される。また安曇野の播隆の動静を伝える「務台家文書」、播隆の日常の生活を記した「葎の滴（むぐらしずく）」、播隆が穂高岳に名号石を安置したことや槍の岩壁にかけた鉄鎖の具体的記述のある「念仏法語取雑録」、昔の版木等々に感動的出合いがあり、また多くの播隆研究家のご協力により私の『槍ヶ岳開山播隆』を出版することができた。

その後も播隆の遺品が発見されているが、今は病身しかも老齢の私には遠方へ調査に出かける余力はない。幸いにして黒野こうき氏が中心となり「ネットワーク播隆」が結成されて播隆の研究はさらに深められていることは嬉しい限りである。

今回、大町山岳博物館の企画で播隆展が開催されることになった。これにより播隆上人の偉大な業績がさらに広く世間に知られるようになれば私にはこの上ない喜びである。

（ネットワーク播隆顧問、槍ヶ岳山荘、山岳写真家）

播隆関係史跡等紹介

ここで紹介した写真は※印のある当館によるもの以外、全て黒野こうき氏撮影・提供による。

1-1　播隆関係史跡等の所在地周辺図

1-2　播隆上人生家跡　富山県富山市

現在、生家の跡地には播隆の顕頌碑が建つ。
播隆は天明6年(1786)に越中国新川郡河内村(現富山県富山市、旧上新川郡大山町河内)の中村佐右衛門の次男として生まれ、十代で家を出るとその後の生涯で一度も故郷に戻ることはなかった。河内村は山深い山間の集落で、現在は廃村になっている。

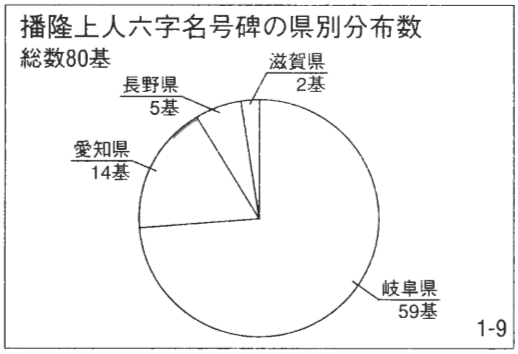
播隆の墓碑

播隆の墓碑は4ヶ所ある。富山県富山市の旧上新川郡大山町河内、岐阜県揖斐郡揖斐川町の一心寺、岐阜県岐阜市の正道院、岐阜県美濃加茂市の祐泉寺(もとは弥勒寺にあったもの)である。近年、一心寺、正道院、祐泉寺の3ヶ所の墓から播隆の遺骨が確認されている。

1-3　播隆上人墓碑　富山県富山市・旧上新川郡大山町河内
1-4　播隆上人墓碑　岐阜県揖斐郡揖斐川町・一心寺
1-5　播隆上人墓碑　岐阜県岐阜市・正道院※
1-6　播隆上人墓碑　岐阜県美濃加茂市・祐泉寺※

1-7

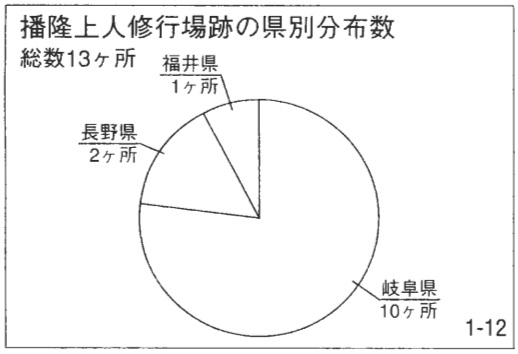
1-8



1-9

1-10

1-11



1-12

播隆の開山寺院

現在、播隆の開山と伝えられている寺院は岐阜県揖斐郡揖斐川町の一心寺と岐阜県岐阜市の正道院の二山である。明治6年(1873)に廃寺となった岐阜県美濃加茂市の弥勒寺は臨済宗妙心寺派の寺院であったが、播隆開山寺院に近い由来を持っていた。このほかにも、開山ではないが播隆ゆかりの寺院や堂宇が各地にある。

1-7　播隆上人開山寺院・播隆院一心寺　浄土宗※

岐阜県揖斐郡揖斐川町

揖斐川町成台山の山頂に建てられた播隆の草庵がもとになり、天保年間(1830—1844)の初め頃に本堂を建立、播隆を開祖として城台山播隆院阿弥陀堂と称し、本尊に善光寺如来像が安置された。その後、二世・隆盤によって阿弥陀寺と改称され、明治12年(1879)に五世・坂口隆説によって現在の寺号に改称されている。

1-8　播隆上人開山寺院・播隆山正道院　浄土宗

岐阜県岐阜市

もとあった正道庵という庵が天保年間(1830—1844)に建て直された際、開山の祖として播隆が迎えられたと推測される。しかし、実質を任されたのは二世・隆髪と考えられる。三世・隆芝は『行状記』にも登場する。昭和27年(1952)に現在の院号となる以前は、正道庵あるいは播隆堂などと呼ばれていたようである。平成6年(1994)に播隆山という山名が冠された。

1-9　播隆上人六字名号碑の県別分布数

ネットワーク播隆編・発行『播隆研究　第1号』(2000)の「播隆名号碑分布表」より一部改訂・作成

「南無阿弥陀仏」の文字を自然石などに刻んだ石碑を六字名号碑(ろくじみょうごうひ)という。播隆筆による名号碑は80基の存在が確認されており、それらは播隆の足跡や影響を知る上で重要な手がかりとなっている。

播隆が書いた六字名号の書体を大別すると、「花文字風」と「梵字風」のふたつのタイプに分けられる。さらに「最初期体」と「異体」を加えた4つに分類される。これらの呼称および分類は黒野こうき氏による。

1-10　播隆上人六字名号碑　天保7年(1836)

長野県南安曇郡三郷村　平福寺　碑高150㎝　花文字風

刻銘「播隆　花押」「天保七丙申二月十五日」「上長尾村中」

1-11　播隆上人六字名号碑　天保11年(1840)

長野県松本市　玄向寺　碑高135㎝　梵字風

刻銘「播隆　花押」「天保十一庚子十月二十一日」「暁道播隆大律師」

1-12　播隆上人修行場跡の県別分布数

ネットワーク播隆編・発行『播隆研究　第5号』(2004)の「本書でとりあげた播隆上人修行場跡」(平成16年4月　黒野こうき作成)より作成

播隆が修行したと伝えられている山中の岩屋や窟などが岐阜県を中心に10ヶ所余り存在している。なお、これらのうちには文献史料で明らかな裏付けがあるもの、あるいは地元の伝承でのみ残るものも含まれている。

1-13

1-13　伝播隆上人修行場跡「女鳥羽の滝」

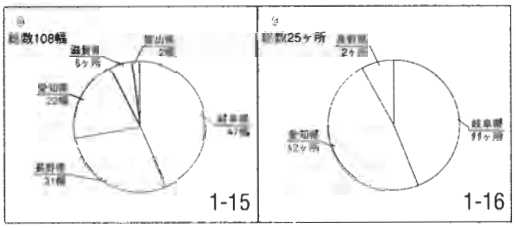
長野県松本市　玄向寺

玄向寺は播隆ゆかりの寺院である。当時の住職・立禅（りゅうぜん）和上は播隆より年長で、浄土律の先輩であり学僧であったため、播隆は教えを受けるところが多かったと思われる。天保11年（1840）7月から9月にかけて病に伏した播隆は、立禅和上亡き後の住職・立亨（りゅうきょう）のもと、玄向寺で静養した。同寺の裏山にある女鳥羽（めとば）の滝で播隆が修行したと伝えられる。

1-14

1-14　青島念仏講　長野県松本市

長野県松本市島内の青島阿弥陀堂は信濃における播隆の活動の拠点となったところである。現在、お堂には槍ヶ岳寿命神（やりがたけじゅみょうじん）と名号の2本の軸が残され、講員の方がたと高松寺（松本市）住職・岩渕隆祥師によって播隆念仏講が毎月行なわれている。



1-15　播隆上人六字名号軸の県別分布数

ネットワーク播隆編・発行『播隆研究　第3号』（2002）の「播隆名号軸分布表」より作成

1-16　播隆上人念仏講・念仏行事の県別分布数

ネットワーク播隆編・発行『播隆研究　第2号』（2001）の「本書で取りあげた播隆念仏講・念仏行事一覧表」（平成13年4月　黒野こうき作成）より作成

2-1

2-1　有明山　標高2,268m※

有明山は中世の和歌にも詠まれ、古くから人びとに好まれた山で、富士山に似た山容から「信濃富士」と呼ばれ親しまれた。鎌倉時代頃になると、有明山は修験の山として知られ、修験者たちが集まる。当時の修験に関係するものとして、長野県南安曇郡穂高町有明宮城に明王院跡という寺跡やその寺にあったといわれる不動明王像、修験場として使用されていた魏石鬼窟（ぎしきのいわや）などが残っている。一般の人びとが有明山に登るようになったのは江戸時代後期になってからである。

2-2

2-2　小蓮華山の大日如来立像（石仏）※

大日岳とも呼ばれる小蓮華山（標高2,769m）山頂には大日如来立像の石仏が安置されている。その石仏の側面には「享和元酉六月二十四日糸□□・・・」と銘文が刻まれる。銘文の「糸」以降は欠損しており不明だが、糸魚川方面の人物が享和元年（1801）に祀ったものと推測されている。

昭和10年（1935）7月に白馬岳山頂近くで一体の石仏が見つかった。地元には、天正2年（1574）に信濃は南小谷の源長寺開祖・洞光和尚が砂岩に刻んだ地蔵菩薩像を大日岳山頂に祀ったがその後持ち去られてなくなり再び刻んで祀ったという言い伝えが残ることから、発見された石仏はおそらく話に伝わるもので、現在の石仏が祀られる以前、最初に小蓮華山の山頂に安置されていた石仏と推測された。石仏は祟りをおそれてもとの場所に埋められたが、昭和24年に再び掘り出されている。（長沢武著「白馬岳小史」『山と博物館』第6巻6号〔大町山岳博物館、1961〕）

小蓮華山の大日如来立像のほか、白馬村落倉の地蔵菩薩立像（風切地蔵、地元では風除地蔵）と同村野平から鬼無里村の落合に通じる柄山峠にある地蔵菩薩像の三体を結ぶと一直線をなし、これにより地蔵尊の念力による防波堤が形成されて大風の力を弱め、厄害をも防ぐと信じられたという。〔田中庄左エ門著「随想　切地蔵」田中欣一編『白馬小谷研究』（白馬小谷研究社、1974）〕

2-3

2-3　伊吹山　標高1,377m

2-4　伊吹山播隆屋敷跡

播隆が伊吹山で修行を行なった際、地元の信徒が播隆のために建てた草庵（播隆屋敷）があった場所と伝わる。草庵は「三間に八間（約5.5×15m）」の間口・奥行であったというが、現在はその残骸は残されていない。平成2年（1990）9月に記念碑が建立されている。

2-5　笠ヶ岳　標高2,898m

2-4

2-5

2-6飛州新道跡　長野県南安曇郡三郷村

文政9年（1826）以降、5回にわたる槍ヶ岳登山において、播隆は信濃国安曇郡小倉村（現長野県南安曇郡三郷村小倉）を基地とし、大滝山稜線近くの小滝までは飛州新道を登った。

飛州新道は信濃（信州）と飛騨（飛州）を結ぶ古道を改善し、交易の道として開かれた。小倉村から山越えし、上高地経由で中尾峠を越えて飛騨国吉城郡中尾村（現岐阜県高山市奥飛騨温泉郷中尾）に至る道筋であった。文政3年（1820）、信濃国安曇郡岩岡村（現長野県松本市梓川倭）庄屋の岩岡伴次郎（英総）によって開削が着工され、文政7年には上高地までの区間が一部開通。天保6年（1835）になり上高地から中尾峠越え区間の開削が着工され、同年に全通して供用が開始された。しかし、安政6年（1859）、大雨により新道各所が崩落し、通行不能となる。文久元年(1861)、「新道切塞ぎ願書」提出によって新道は閉鎖された。

2-7　飛州新道概念図

中島正文著「神河内志」『山岳 第36年1号』（日本山岳会、1941）『北アルプスの史的研究』（桂書房、1986）収録より

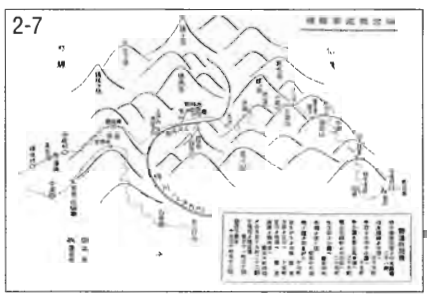
2-8　長尾阿弥陀堂跡　長野県南安曇郡三郷村※

天保6年（1835）10月、播隆は信濃の鍋冠山中で冬篭り用の小屋掛を図ったが大雪のため失敗し、足の指2本を凍傷で失った。その後、信濃国安曇郡長尾村（現長野県南安曇郡三郷村長尾）の阿弥陀堂に入り足を治療して越年し、7月まで滞在した。現在、阿弥陀堂の建物は残っていない。

2-6

2-9　大日堂　長野県南安曇郡三郷村※

飛州新道は文政7年（1824）には上高地までの一部区間が開通していた。文政9年以降、5回にわたる播隆の槍ヶ岳登山では、この道が利用された。当時の登り口には、播隆が祈願したといわれる大日堂が現在もあり、後年になって建立された播隆の六字名号碑がある。


2-7

2-8

2-10　弘徳院　長野県南安曇郡三郷村※

天保6年（1835）6月、信濃国安曇郡野沢村（現長野県南安曇郡三郷村温野沢）の真元僧庵に招請された播隆は、この庵で説法を行なった。真元は野沢村庄屋・務台（むたい）家の景邦・景満兄弟の叔父にあたる久兵衛のことで、天保3年に仏門に入っていた。当時、真元僧庵あるいは南の庵、または恵戒庵と呼ばれていた庵は務台家宅の近くに建っていたが、今はない。現在、務台家の墓所には弘徳院（務台一族の大祖先の院号から名付けられた）という明治34年（1901）頃に建てられた堂宇があるが、この建物の一部に真元僧庵の部材が使われていると推測される。

2-11　槍ヶ岳　標高3,180m

「槍の穂先」と称される鋭く尖った山頂部をもつ槍ヶ岳は、遠くからでもすぐにそれと分かり、北アルプスを象徴する山の代表格である。長い年月にわたって風雨や氷雪の浸食を受けて峰の四方のもろい地質が削りとられ、堅い地質だけが残されて現在のような山容になった。周辺山域は周氷河地形によって彩られ、アルペンムード漂う独特の景観をみせる。

2-12　ブロッケン現象

山頂や稜線に霧があり、太陽光線が水平に近い角度から差してくるときに見られる気象現象。ブロッケンの妖怪ともいい、こうした呼び名はドイツにある山、ブロッケン（標高1,142m）ではじめて観測・報告されたことにちなむ。自分の影が霧に映った場合、ときとして霧に投影された影の頭の回りに光の回折による光の環が見えることがある。こうした現象を体験した播隆は、これを御来迎（浄土宗の信徒が臨終の際に阿弥陀仏や菩薩が来て極楽へ迎えとること）ととらえた。

2-13　播隆上人修行場跡「播隆窟（坊主の岩屋）」

槍沢上部の標高およそ2,700mにある岩窟

文政9年（1826）8月、播隆は1回目の槍ヶ岳登山でこの岩窟に同行者とともに泊まった。その後もこの岩窟は播隆の修行場となり、天保5年（1834）の4回目の槍ヶ岳登山では53日間山籠して修行を行なっている。

「信州鎗嶽畧縁起」の中には「さて此頂上より十二、三丁（約1.3～1.4km）下りて、岩窟あり。三間（約5.5m）に五間（約9m）許。修造して諸人参籠通夜の室にせんと欲すれども、力微にしていまだ成就せず。もし余が露命消しなば、後に有力の衆、営造したまわんことを庶冀す。」とある。また『行状記』では「赤間ヶ嶽（現赤沢岳）の麓を登ること二里（約8km）斗りの処に、不思議哉、大いなる岩窟あり、内部は二間（約3.6m）四面なれど、入口は九尺（約2.7m）斗り、又其裡の辰巳の角隅に、高さ壱尺（約30cm）斗りの壱室あり、其の東の方に四尺（約1.2m）方斗りの窓ありたり」とある。

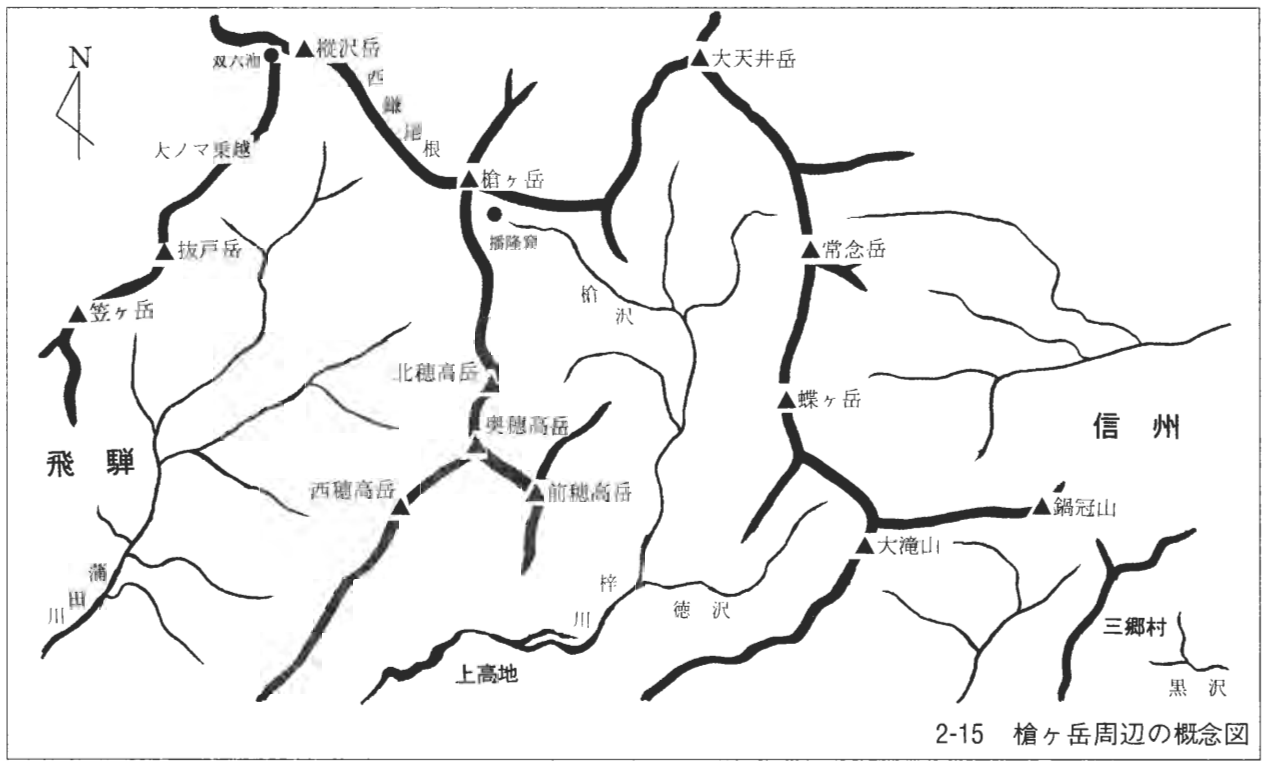
明治期以降、この岩窟は近代登山者に露営場所として利用された。近年、大喰岳からの土砂の流入によって内部が埋まり、狭くなっていたが、槍ヶ岳開山播隆上人奉賛会（代表：玄向寺・荻須眞教師）が追慕登山の際に土砂を取り除くなどの整備を行なっている。

2-14　播隆窟内の播隆石像

明治期に播隆の徳をたたえて安置されたもの

播隆窟の入口にはその徳をたたえ、播隆の石像が安置されている。この石像は上高地の主といわれた猟師・上條嘉門次が背負い上げたものと伝えられる。以下、刻銘を記す。

明治三十□年八月
東筑摩郡本郷村　玄向寺
同志南安曇郡明盛村　百瀬豊三郎
同郡温村　務台与一



2-15　槍ヶ岳周辺の概念図

2-16　槍の穂先

播隆は1回目の槍ヶ岳登山の後、美濃・尾張・三河・山城・若狭の諸国を巡錫（じゅんしゃく）して浄財を集め、大坂で鋳造した銅製の阿弥陀仏像のほかに木製の文殊師利菩薩像を持って信濃へ向かい、文政11年（1828）、再び中田又重を案内にして2回目の槍ヶ岳登山を行なう。頂上に岩を集めてささやかな祠（ほこら）を作り、先の二仏に加えて播隆が常に肌身離さず持っていた銅製の観世音菩薩像を加えた3体の仏像を祠の中に安置し、槍ヶ岳開山を果たした。

2-17　穂高連峰

播隆が槍ヶ岳開山を果たした文政11年（1828）の2回目の槍ヶ岳登山で、播隆は穂高岳へも登り、その頂に六字名号碑を1基安置している。しかし、その場所は穂高岳のうち、いずれの峰の山頂か特定されておらず、岩窟の中に納めたという名号碑は現在のところ確認されていない。以下、「念仏法語取雑録」（一心寺蔵）の鎗ヶ嶽仏縁安置之記より。

（漢文の原文を書き下し、仮名を付した）
穂高嶽ノ最頂宝前ニ安置シ奉ル
南無阿弥陀仏名号石一柱基
時ニ八月朔日、最高頂ニ勧請シ奉ル也。夫保高嶽ノ寿命神ト

為シテ、乃チ永ク後代ニ伝ヘ、広ク利益ヲ施シ、有情ヲ救済セン。今茲ニ巌窟ヲ造作シテ、其ノ中ニ安置スルハ、則チ国内安寧ニ、兵戈不用、衆民安楽ニシテ、後浄邦ニ生レ令めん為ナリ。念仏称名シ、祈願回向スル所ナリ。時に文政十一年戊子仲秋の初五

称名業行人

播隆敬白　判

2-18

2-18　槍ヶ岳頂上の祠

播隆による4回目の槍ヶ岳登山では、播隆のほかに信濃は小倉村の中田又重、松本新橋の大坂屋佐助、猟師2名、飛騨の黒鍬（くろくわ）職（土工）も参加した。一行は頂上を平らにし、木を彫って祠を作り、その中に先年に安置した3体の仏像と新たに持参した1体の仏像を加えて納めた。現在、槍ヶ岳頂上に新しく造られた祠には播隆が安置した四尊はなく、その行方は明らかではない。

明治39年（1906）、『槍が嶽乃美観』の著者である丸山文台ら一行が槍ヶ岳へ登山した際、「一寸五分位（約4.5cm）」の4体の仏像とそれらが納められた各祠ならびに播隆が記した木製の銘札を確認している。また、明治43年に3回目の槍ヶ岳登山を行った小島烏水も祠と4体の仏像を見ている。「右の肩へ出ると、小さな木祠があつて、小さな木像一個と、青錆びた小指ぐらゐな銅像が三個、嵌め込まれてゐる」（小島烏水著『日本アルプス　第二巻』前川文榮閣、1911）。播隆が安置した四尊は全て盗難にあったといわれているが、大正6年（1917）に実業家・福澤桃介らと槍ヶ岳へ登った後藤文吉は山頂直下の岩の間から木製の仏像を拾っている。これは播隆が安置した文珠師利菩薩像と思われるが、その後の行方は不明である。

大正8年（1919）、穂苅三寿雄が登山した際には祠は破損し、阿弥陀仏の銅像1体が転がっており、木箱を作って仏像を納めて置いたが、翌年にはなくなっていたという。また、仏像がはめこまれていた木は丸太を割ったもので、そこに彫られた穴の中に仏像が納められていたという。

2-19

2-19　槍の穂先の鎖場

播隆はかねてから槍ヶ岳登拝者の安全を図るため、槍ヶ岳に鉄鎖をかけることを計画していた。天保7年（1836）、信濃国松本新橋（現長野県松本市新橋）の大坂屋佐助が『信州鎗嶽畧縁起』を刷って鉄鎖の資金を募り、播隆も信濃・飛騨・美濃などを巡錫して浄財を集めたところ、はさみや包丁や鎌や鍬（くわ）などが寄進され浄財も集まり、たちまち鉄鎖が鋳造された。

伝えられるところでは、この鉄鎖は昔から金物で有名な美濃の関で造られたという。それを「槍ヶ岳行の鉄鎖」と称して、沿道の信徒たちが宿場から宿場へと運び、3～4ヶ月後には信濃の小倉村へ到着した。しかし、天保7年は全国的な飢饉（ききん）の年で世情も穏やかでなく、幕府による政治も不安定となっていた。さらに、飢饉は、播隆が槍ヶ岳開山によって清浄な山をけがしたために神が怒って凶作になったという流言が広まり、松本藩は槍ヶ岳への鉄鎖の取り付けを禁じた。天保11年になり、ようやく鉄鎖をかけることが認められた。鉄鎖は8本あり、うち4本は岩岡伴次郎方、ほかの4本は近隣で預かっていた。病をわずらった播隆の代わりに中田又重ら信徒たちにより、鉄鎖は山頂から約200mの間に6箇所、合計約60mにわたって掛けられた。未使用の鉄鎖1本は後日まで中田又重方で預かっていたというが、現在は行方が分からない。もう1本は黒鍬（土工）の者が槍ヶ岳の現地で加工して、ほかの鎖に連結して掛けられたものと思われる。

「念仏法語取雑録」（一心寺蔵）には次のようにある。（　）内は注。

鎗百間（約182m）之内、鎖六箇所、

山上より、

一、二丈八尺五寸（約8.6m）　四、三丈六尺五寸（約11m）

二、一丈八尺五寸（約5.6m）　五、四丈九尺四寸（約15m）
三、四丈九尺四寸（約15m）　六、九尺（約2.7m）
惣計　十九丈一尺三寸（約58m）

その後の鉄鎖について、丸山文台・高島畔園・野本柴竹共著『槍が嶽乃美観』（高美書店、1906）には次のようにある。「播隆和尚と殆んど同時代に、安曇郡の花見に奥原某と云う猟師あり、播隆和尚が衆生登攀の為に設置せる鉄鎖を盗み取り、古金として売却せりとぞ。」しかし、渡辺担平が明治37年（1904）に行なった槍ヶ岳登山の様子を記した一文には「危険なところには播隆道人が付けたという鉄の鎖があった」とある。また小島烏水著『氷河と萬年雪の山』（梓書房、1932）の「槍ヶ岳の昔話」には、烏水らが明治35年8月に槍ヶ岳登山した際の話として「江戸時代に、この山へ始めて登つた念仏行者（播隆上人）が、鉄の鎖を槍の穂へ繋いだこと、及び、ついこなひだまで、鎖の断片が残つてゐたなどといふ話しを、その折聞いたが半信半疑で」とあることから、鉄鎖の一部は後年まで残っていたようである。

2-20　中山道太田宿の旧太田脇本陣林家住宅※

国重要文化財　岐阜県美濃加茂市

天保10年（1839）、播隆は下総国葛飾郡行徳の徳願寺・徳順和上について、和上位の修行を行なった。その帰途、天保11年春に信濃の松本に立ち寄り、周辺にて布教活動を行なった。7月から松本の玄向寺で病に伏したが、信徒たちによって槍ヶ岳に鉄鎖がかけられて長年の念願を果たすと、信徒らにそのお礼を述べてから中山道を上り、美濃は揖斐の庵へと向かう。しかし、途中、美濃太田の林市左衛門方でまたも病に伏し、ついに10月21日に大往生する。行年55歳であった。

格子戸と連子造りの窓、屋根の両側に設けられたうだつなど、現在も江戸時代の姿を残す林家の住宅は明和6年（1769）に建てられたもので、修復を重ねながら代々林家の住居として利用されてきた。

3-1　第1回播隆シンポジウム

「ネットワーク播隆」（代表・黒野こうき氏）は播隆研究を目的にする組織として、播隆の命日にあたる平成11年（1999）10月21日に播隆開山寺院の正道院（岐阜県岐阜市）で発足した。発足以来、播隆研究の報告・発表会「播隆シンポジウム」を毎年開催し、播隆研究の会報誌『播隆研究』を発行（年1回）している。

展示構成

本展は「第１部　念仏行者・播隆　―人と足跡―」「第２部　播隆の槍ヶ岳開山」「第３部　播隆研究アラカルト」の３部からなり、槍ヶ岳への善の綱設置にいたるまでの過程を、山登りの道程でいう何合目にあたるかにたとえて展示を構成した。展示は以下のテーマで行なう。

第１部　念仏行者・播隆 ―人と足跡―

一合目　出生から巡錫

第２部　播隆の槍ヶ岳開山

二合目　播隆とその時代

三合目　伊吹山修行

四合目　笠ヶ岳再興

五合目　飛州新道 ―槍への通い道―

六合目　槍登頂 ―初回登山―

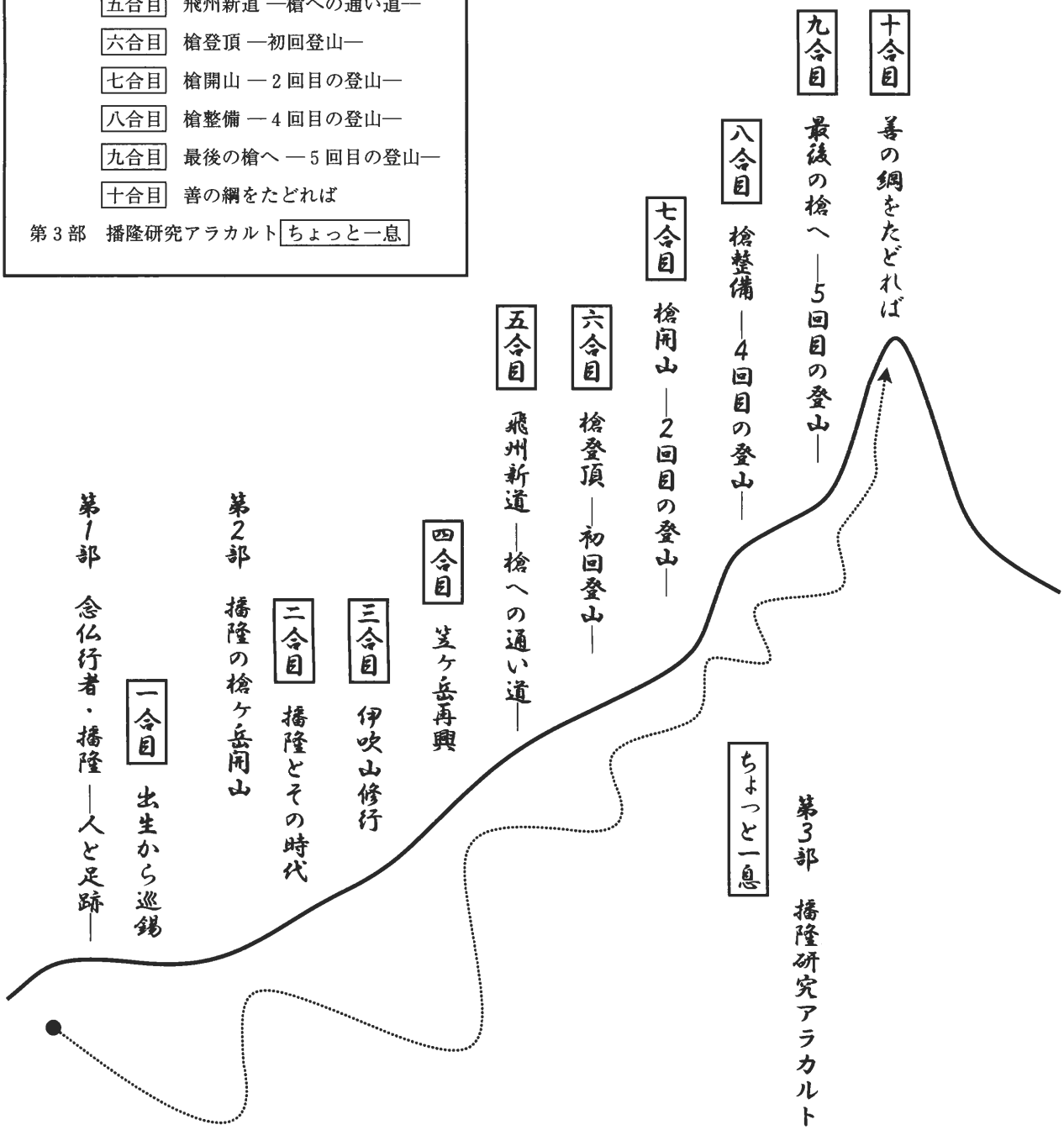
七合目　槍開山 ―２回目の登山―

八合目　槍整備 ―４回目の登山―

九合目　最後の槍へ ―５回目の登山―

十合目　善の綱をたどれば

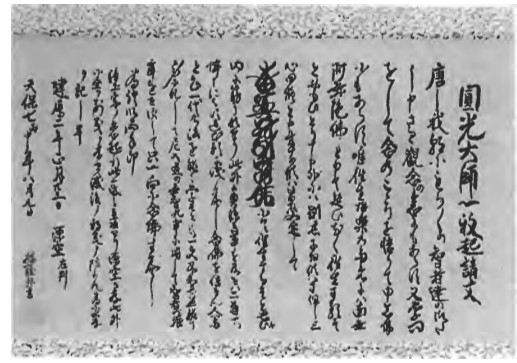
第３部　播隆研究アラカルト　ちょっと一息



展示資料図版

ここに挙げた資料は主な展示資料の一部である。また、写真は※印のある当館によるものや撮影・提供者を明示しているもの以外、全て黒野こうき氏撮影・提供による。

1-1　播隆上人六字名号御影軸　　一部



1-3　播隆上人筆　円光大師一枚起請文　　個人蔵

1-4　播隆上人所持　錫杖頭　　一心寺蔵

1-5　播隆上人所持　托鉢椀　　一心寺蔵

1-6　播隆上人着用　法衣　　一心寺蔵

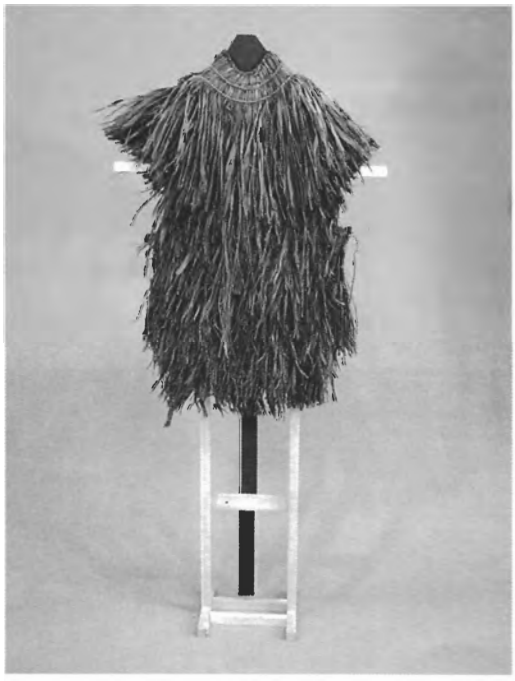
1-7　播隆上人所持　円空作「観音菩薩立像」　　一心寺蔵

1-8　播隆上人所持　護持仏　　祐泉寺蔵

1-10　中村家文書「播隆上人筆書簡」　　個人蔵

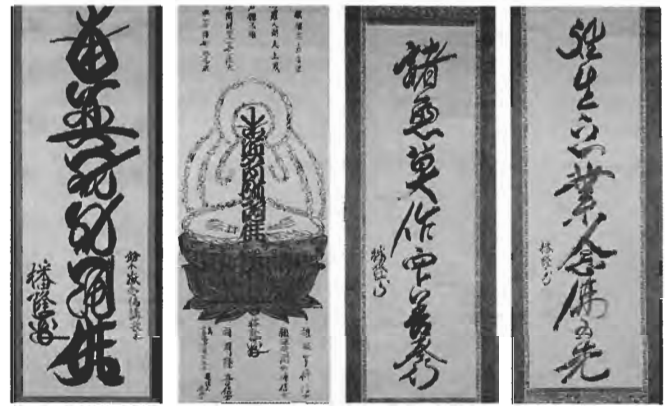
1-11　播隆奉納　喚鐘　　個人蔵※

1-14　播隆上人筆歌軸　　正道院蔵（個人寄贈）※



2-1　アカミノ　　参考展示　当館蔵※

1-12　播隆奉納　扁額「川内道場」　　個人蔵※



（左より）
1-15　播隆上人六字名号軸
1-16　播隆上人書「名体不離尊像」
1-17　播隆上人書「緒悪莫作　衆善奉行」
1-18　播隆上人書「往生之業　念仏為先」　　玄向寺蔵

2-2　葛飾北斎画　富嶽三十六景「諸人登山」　複製
当館蔵※

2-3　善光寺道名所図会
「安曇郡緒山　穂高岳　奥宮　三霊湖」
大町市文化財センター蔵※

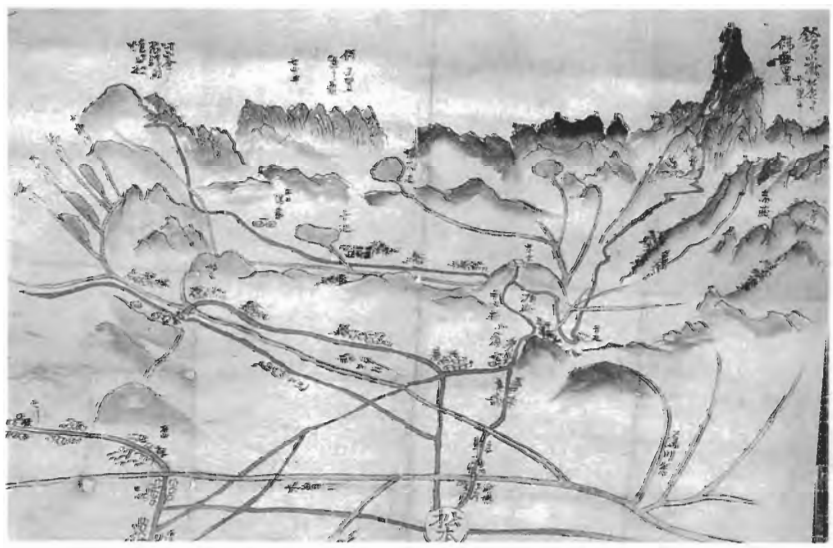
2-4　播隆上人「念仏起請文」　　個人蔵

2-5　播隆上人筆「迦多賀嶽再興記」（左）
2-6　「迦多賀嶽再興勧化帳」　　本覚寺蔵

2-9　中田亦十郎筆「飛州新道見取図」　　個人蔵
（写真パネル・穂苅貞雄氏撮影）

2-10　務台家文書「公私年々雑事記」「景満年譜」（右）　　個人蔵
（写真パネル・降旗正幸氏提供）

2-11　槍ヶ岳開山の大鉈　　一心寺蔵



2-12　播隆上人作「槍ヶ嶽絵図」　　個人蔵

2-13　「槍ヶ嶽壽命神」　　個人蔵
松本市アルプス山岳館展示

2-14　播隆上人筆「三昧発得記」　　玄向寺蔵

2-15　ワラナワ　　参考展示　当館蔵※

2-16　播隆上人筆「和讃」（左）　個人蔵※
2-17　「子供教訓いろは和讃」　個人蔵※

2-18　「信州槍嶽畧縁起」　　個人蔵※

3-1　『開山暁幡隆大和上行状略記』
正道院蔵※

3-2　『槍が嶽乃美観』　　個人蔵※

3-3　秩父宮殿下献上「播隆上人寫眞帖」
祐泉寺蔵※

3-7　一心寺蔵版木の刷物　一式　　個人蔵※

展示資料目録・資料解説

ここに挙げた資料は主な展示資料の一部である。

1-1　播隆上人六字名号御影軸　　一部　紙本彩色　（写真パネル）

梵字風に書かれた六字名号（ろくじみょうごう）の下に、数珠と持蓮華を手に端座した姿で描かれた肖像画

浄土律の僧は法衣の襟を左前にして着るというが、この播隆の肖像もそのように着こなしている。黒染の衣に左肩から緑色の袈裟をかけ、頭には黒色の帽子をかぶる。播隆の御影軸はこのほかにも数点が現存する。

1-2　上條俊介作「播隆上人」原型　　個人蔵

JR松本駅前いこいの広場に建つ播隆像の原型

上條俊介は長野県東筑摩郡朝日村出身の彫刻家。玄向寺の39世・荻須眞雄師をモデルとして制作された播隆のブロンズ彫刻が、昭和61年（1986）になってJR松本駅前いこいの広場に建立された。現在、同様の彫刻が朝日村の朝日美術館（上條俊介記念館）前の縄文公園内にも展示されている。

1-3　播隆上人筆　円光大師一枚起請文　　軸装　天保7年（1836）　個人蔵

播隆が書いた法然の一枚起請文（いちまいきしょうもん）

円光大師は浄土宗祖・法然（源空）の諡号（しごう・高徳の僧などが死後に朝廷からたまわるおくり名）。一枚起請文（起請文とは神仏に誓うことを書き表した文書）は、法然が亡くなる直前の建暦2年（1212）に浄土往生の要義を和文で一枚の紙に書いて遺戒としたもの。法然真筆による一枚起請文は、浄土宗七大本山のひとつ金戒光明寺（京都市左京区）に保存されている。

播隆が説法をするときは法然の一枚起請文の意味を説くだけで、毎回同じ話を繰り返すことが珍しくなかったが、聴衆は少しも飽きることなく熱心に聴いたという逸話が伝わる。記された書は以下の通り。

円光大師一枚起請文
唐し我朝にもろもろの智者達の沙汰
し申さるる観念の念にもあらず。又学問
をして、念のこころを悟りて申念仏
にもあらず。唯往生極楽のためには、南無
阿弥陀仏と申て疑いなく、往生するぞ
とおもいとりて申外には、別の子細候わず。但し
三心四修と申事の候は、皆決定して、
南無阿弥陀仏にて往生するぞと、思う
内に籠り候なり。此外に奥深き事を存ぜば、二尊の
憐みにはづれ、本願に漏れ候うべし。念仏を信ぜん人は、た
とい一代の法を能々学すとも、一文不知の愚鈍の
身になして、尼入道の無知の輩に同して、智者の振
舞をせずして、只一向に念仏すべし。
証の為に両手印をもって為す
浄土宗の安心起行、此一紙に至極せり。源空が所存此外
に全く別義を存ぜず。滅後の邪義を防がん為に、所存
を記し畢。
建暦二年正月廿三日　源空在判
天保七年丙申年八月九日　播隆拝書　印

1-4　播隆上人所持　錫杖頭　　揖斐川町指定文化財　一心寺蔵

播隆が使ったと伝えられる錫杖（しゃくじょう）の頭（かしら）

錫杖は僧侶や修験者などが持つ杖で、木製などの柄の先端に金属製の頭が付いているもの。頭には数個の鐶（遊鐶）が掛けられ、その部分が音を出す。これを振り鳴らして音をたてて誦経（じゅきょう）の調子をとるなど行事作法に欠くことのできない道具である。また、山野を巡る修行では、自分の存在を知らしてクマやヘビなどから身を守る役目もあった。

1-5　播隆上人所持　托鉢椀　　揖斐川町指定文化財　一心寺蔵

播隆が托鉢（たくはつ）に用いたと伝えられる鉄鉢

托鉢は僧侶などが鉢を持って経を唱えながら民家を訪れ、米や金銭の施しを受けて歩く修行をいう。ここでいう鉢とは僧侶の食器のことで、もとはインドの食器をさす。

1-6　播隆上人着用　法衣　　揖斐川町指定文化財　一心寺蔵

播隆が身に着けたと伝えられる法衣（ほうえ）

もとは播隆の生家・中村家にあったものを一心寺がもらい受けたもの。この法衣は褊衫（へんざん）といい、上下別々に分かれていて、上着は背中開きとなっている。浄土律の寺院では僧侶の法衣は生地が麻か木綿、色が茶色かねずみ色、上襟を左前にして着用するという。

1-7　播隆上人所持　円空作「観音菩薩立像」　　揖斐川町指定文化財　一心寺蔵

播隆の護持仏（ごじぶつ・日常身につけたり身辺に置いたりして拝む仏像、あるいは本尊として信仰する仏のことで、念持仏

ともいう)として伝わる円空仏。円空仏とは近世の聖のひとりである円空(美濃国出身)が作仏し、庶民の間に与えた木彫の仏像をいう。円空は鉈(なた)ばつりと呼ばれる独特の彫法によって、生涯に多数の神仏を刻み、現在約5000体余りの円空仏が確認されている。

1-8　播隆上人所持　護持仏　　天保9年(1838)　祐泉寺蔵
播隆が守り、持っていたと伝えられる仏像
厨子(ずし)に納められた仏像は阿弥陀三尊像。中尊に阿弥陀如来像、脇侍に観世音菩薩、勢至菩薩を左右に従えた三尊形式をとる。厨子の両扉には「丸に立ち葵(あおい)」(播隆が用いた家紋)と「左万字(まんじ)」の紋様が描かれ、背面には「天保九戌六月　播隆院護持佛」の書がある。

1-9　播隆上人六字名号軸　　小幅　個人蔵
仏や菩薩の名を名号(みょうごう)といい、六字は南無阿弥陀仏(阿弥陀仏への帰依の意)をさす
この六字名号は花押が手書きではなく、捺印か刷りのようである。こうした六字名号を広く民衆に授与して歩くことを賦算(ふさん)といい、播隆は布教方法として版木で刷った名号札を集まった人びとに配布したり、自筆の名号を与えたりした。現在、寺院蔵や講中所有、あるいは個人蔵のものなど、播隆の名号軸は約100点が確認されている。

1-10　中村家文書「播隆上人筆書簡」　　天保6年(1835)2月4日付　個人蔵
播隆が生家・中村家へ送った直筆の手紙
文中には「らくゝと五十年にこへる山坂もとなへ居るこそ六字なりけれ」という歌が詠み込まれ、この書簡は播隆の生年に関する資料のひとつとなっている。諸説あった播隆の生年は、岐阜県美濃加茂市の林家に伝わる古文書(林家文書)の「播隆聖人由緒書」によって天明6年(1786)と確定した。

1-11　播隆奉納　喚鐘　　天保3年(1832)頃　岡本太右衛門作　個人蔵
天保3年(1832)に播隆が生家・中村家の川内道場(かわちどうじゃ)へ贈ったもの　個人蔵
川内道場は貞享の頃(1684-87)の大洪水で破壊、廃止されたが、宝永年間に佐兵衛という人物がこれを修復する。その後も長年にわたって道場は廃止されていたが、天保2年(1831)に播隆のはたらきによって再興が許された。その再興にあたって播隆は生家である川内道場へ阿弥陀仏一体、親鸞・蓮如の六字名号軸、喚鐘(かんしょう)を奉納している。刻まれた銘は以下の通り。
(漢文で記された原文を書き下して平仮名を付した)
　銘に曰く
願くは諸の賢聖、同じく道場に入りたまえ
願くは諸の悪趣、倶時に苦を離れよ
夫れ此の道場は、蓮如上人已来興立する所なり。貞享の頃、渓水土馳せ、道埋れ破却するも、助力スル者ナシ。然ルニ宝永歳中ニ至つて、佐兵衛と申す人有り、作屋を造営す。道場の地名、已に我カ祖父マデ三代也。予今の再興は、春日明神作立像阿弥陀仏一躰、親鸞・蓮如両祖の真筆六字宝号等を以て、檀寺に達す。ここに命により、ここに安置し奉る。並びに鑿一つと喚鐘を以て、道場を再興致し置く者也。之に依つて、自今已後、永代児孫に至るマテ、退転無く修建せしむべき者也。
天保三辰歳七月　播隆敬い謹んで之を書す
願くはこの功徳を以て平等一切に施し
同じく菩提心を発して安楽国に往生せん
　美濃岐阜
　　御鋳物師　岡本太右エ門藤原定継

1-12　播隆奉納　扁額「川内道場」　　個人蔵
天保9年(1838)に播隆が生家・中村家の川内道場に贈ったもの
御堂関白家元大納言女の揮毫(きごう)による書を原本にして一枚板に浮彫されている。扁額(へんがく)は門や室内にかける細長い額のことで、この額もかつて道場に掲げられていたと思われる。播隆の生家である中村家は川内道場(かわちどうじゃ)と称し、代々浄土真宗の道場であった。道場というのは簡易寺院といったもので、信徒が集まって念仏を唱えた所をいい、初期の浄土真宗にみられる。川内道場の縁起は蓮如以来と伝えられているが真相は明らかではない。
裏書「于時　天保九年戊戌歳初夏佛日／松平徳川天下大道師／播隆比丘／納之」

1-13　播隆上人六字名号軸　　梵字風　無縁寺蔵・法蔵寺提供

1-14　播隆上人筆歌軸　　正道院蔵(個人寄贈)
一筆書きした丸い輪(円相)の中に法然の御歌を記したもの
書「露の身はここかしかにて消ゆるとも心は同じ花のうてなに　播隆書　印」
この歌は『行状記』において別離の場面で4回引用されている。円相(えんそう)は禅僧がよく描き、無始無終(始まりも無ければ、終わりも無し)や無餘無欠(満月のように、完全で円満である)などの賛が添えられる。悟りの境地を形象化したものであるともいわれるが、明らかな一義的意味はなく、円の解釈は見る人の心にまかせられる。

1-15　播隆上人六字名号軸　　花文字風　玄向寺蔵
添書「鎗ヶ嶽念仏講授之」

当時、美濃地方を中心に信濃や飛騨など各地で、播隆に帰依（きえ）する篤信家たちによって念仏講が結成された。講中の人びとに書き与えられた播隆直筆の六字名号軸は現在も大切に保管されており、信濃の小倉村や松本の名号軸には「槍ヶ岳念仏講」と書かれたものが遺される。『行状記』には「信参尾濃飛五ヶ国の遠近を厭はず、鎗ヶ嶽登山講てう講社を結びて、登山の便宜に供へる為めと云々」とあり、当時、各地にこうした槍ヶ岳念仏講が結成され、講中の人びとによる槍ヶ岳への登拝が絶えなかったと思われる。しかし、慶応4年（1868）の神仏分離（神仏習合の廃止）によって、槍ヶ岳への講中登山は大きな打撃を受けた。

1-16　播隆上人書「名体不離尊像」　　軸装　玄向寺蔵

「南無阿弥陀仏」の文字で仏の姿を形作って描いた名体不離尊像（みょうたいふりそんぞう）は念仏行者・徳本がはじめた様式の書で、播隆も同様にして描いて信徒に授与した。

1-17　播隆上人書「緒悪莫作　衆善奉行」　　軸装　玄向寺蔵

1-18　播隆上人書「往生之業　念仏為先」　　軸装　玄向寺蔵

1-19　千人講の大数珠　　一心寺蔵

播隆開山寺院・一心寺（岐阜県揖斐郡揖斐川町）の千人講で昭和20年代頃まで使われていたもの

百万遍念仏は全国的に行なわれ、彼岸などに集落の人びとが一箇所に集まり、名号軸を掲げた場所で輪になって大数珠を回しながら全員で念仏の唱和を行なう講（念仏講）として現在でも行なわれている。大勢で大数珠の珠（基本的には普通の数珠の珠である108粒を10倍した1080粒とする）を回し、一粒繰るごとに念仏を唱えていくことで、その総和をもって百万回の念仏を唱えたとする。

江戸時代後期の檀家制度が確立された時代にあって、寺院を新しく創設して、檀家ではなく信徒のみによる支えによって寺院を維持していくことは非常に困難であった。檀家を持たない一心寺は、かつては修行僧が常駐する念仏道場として栄え、それを支えていたのが千人講であった。

2-1　アカミノ　　参考展示　当館蔵

文政8年（1825）の百姓一揆「赤蓑（あかみの）騒動」に加わった人びとが着ていたのが、こうしたヤマブドウの樹皮で作ったミノであった

文政8年（1825）に信濃国松本藩大町組佐野村（現長野県北安曇郡白馬村佐野）から起こった百姓一揆は「赤蓑騒動」と呼ばれているが、この騒動に参加した人びとはヤマブドウ製のミノを身にまとっていた。このミノは赤味を帯びた色に見え、この地域では一般にアカミノと呼ばれていた。

2-2　葛飾北斎画　富嶽三十六景「諸人登山」　　複製　当館蔵

2-3　善光寺道名所図会「安曇郡緒山　穂高岳　奥宮　三霊湖」　　大町市文化財センター蔵

2-4　播隆上人「念仏起請文」　　木版刷　個人蔵（写真パネル）

播隆が配ったという独自の起請文（きしょうもん）

文政8年（1825）頃、播隆が伊吹山の岩屋や草庵（播隆屋敷）にこもって、木食一飯・単衣・一向専称の千日間の修行を行なった際、その徳を慕って近隣からだけでなく遠方からも大勢の人びとが集まった。そのとき、播隆は法然の「一紙小消息」（念仏の教えの要旨が簡明にまとめられた法然の手紙）と「一枚起請文」を参考にした播隆独自の起請文を木版刷にして配布したといわれる。

夫末代の衆生在家無智の男女たらん輩ハ、只一心に阿弥陀仏の本願を信じ、阿弥陀如来たすけたまえとおもふ心にうたがいなく、南無阿弥陀仏と申せば、かならず極楽に往生すべし、されは弥陀超世の本願にハ、智者上人のふるまいもいらず、学問分別の沙汰もいらず、又観念工夫の法聞にもあらず、高貴物知りの念仏にもあらず、只並阿弥陀仏と申セハ、仏智不思議の願力にて、御たすけ有つる事と存じて、念仏申外にハ何の子細も候ハず、阿弥陀号の六字の内にハ、たのむ心も、しんずる念も、一切の念慮ハ皆ことゞく願行相続の名躰に籠らせ玉へハ、一切衆生の利益ハきわまりなきものなり、故に分別なき三ツ子とてもうたがうべからず、一生造悪の者も一念懺悔すれハ、業障消滅して、如来の御来迎にあづかるが故に、善人も悪人もいとわず、上根も下根もいわず、只我身ハわるきいたづら者と思いつめて、一心に弥陀の名号を唱ふれハ、不捨の誓益にたすけられて往生すべし、されハたのむへきは弥陀如来、まいるべきは本願の力、念仏申べきハ衆生の所作なり、たすけ玉ふハ如来の御仕事なりと存じて、懈怠なく念仏申べき者なり、

文政八乙酉年正月廿四日書之　　播　隆　花押

2-5　播隆上人筆「迦多賀嶽再興記」　　高山市指定文化財　本覚寺蔵

播隆が笠ヶ岳再興の様子を記したもの

播隆は文政4年（1821）夏に飛騨の高原郷を訪れると、文政7年までの約4年間に笠ヶ岳へ4回登拝し、笠ヶ岳の再興、山頂への参詣登山道の開設と一里塚の設置、山頂への阿弥陀如来像の安置を行った。播隆の笠ヶ岳登山以前、すでに数人の人びとが登山しており、それらの登山の根拠地は後年の播隆と同じく飛騨は本郷の本覚寺（岐阜県高山市上宝町本郷）であったと推測される。笠ヶ岳は文永年間（1264－1275）に道泉によって初登山されたと思われるが、その様子は明らかではない。「迦多賀嶽再興記（かたがたけさいこうき）」は文政6年8月に播隆が本覚寺で書き記したもので、同年同月に播隆と18名の同行者が

笠ヶ岳山頂に登って再興を果たした全容が記されている。

2-6 「迦多賀嶽再興勧化帳」　高山市指定文化財　本覚寺蔵
播隆による笠ヶ岳整備への寄進者名などが記される
播隆は文政6年(1823)に「迦多賀嶽再興記」を記した後、笠ヶ岳の登山道に一里塚の設置と山頂に阿弥陀如来像の安置を行なった。その寄進の趣旨や寄進者名などを記した奉加帳である。

2-7 南裔和尚の鉄札　高山市指定文化財　本覚寺蔵
播隆が笠ヶ岳山頂から持ち帰ったもの
播隆は文政6年(1823)に初めて笠ヶ岳へ登ったとき、頂上に建っていた祠に貼られた鉄札から2枚を持ち帰り下山し、再興を決心した。これはそのうちの1枚で、現存が確認されているのはこの1枚のみである。宗猷寺(岐阜県高山市)十世・南裔(なんえい)は、播隆の笠ヶ岳登山に先立つこと約40年、天明2年(1782)6月に笠ヶ岳へ登っている。このとき南裔は頂上に小さな祠を建て、その中に阿弥陀仏などの仏像5体を安置した。以下、銘文を記す。
奉興立傘嶽大権現本地　薬師如来
天明二壬寅年　本願主　現住宗猷北州謹誌
六月如意殊日　今見右衛門公明

2-8 笠ヶ岳頂上安置阿弥陀仏　複製　高山市役所上宝支所蔵・ふるさと歴史館展示
笠ヶ岳へ登って再興を果たした播隆が飛騨・美濃の各地を巡錫して浄財を集めるなか、山城国(現京都府南部)の吹田屋弥三郎とその母つる、妻てるから銅製厨子入りの阿弥陀如来銅像の寄進を受ける。播隆は文政7年(1824)8月に信徒ら総勢66人とともに笠ヶ岳へ登り、この仏像を頂上に安置した。

2-9 中田亦十郎筆「飛州新道見取図」　個人蔵　(写真パネル・穂苅貞雄氏撮影)

2-10 務台家文書「公私年々雑事記」「景満年譜」　個人蔵　(コピーパネル・降旗正幸氏提供)
信濃における播隆の動向を最もよく伝える古文書が、信濃国松本藩長尾組野沢村(現長野県南安曇郡三郷村温野沢)庄屋の務台(むたい)与一右衛門景邦が記した「公私年々雑事記」と、その弟で準養子となっていた久左衛門景満が記した「景満年譜」である。いずれも歳時記風に書き記された覚書で、当時の事件や事象だけでなく、それらの背景まで察することができる内容となっている。

2-11 槍ヶ岳開山の大鉈　揖斐川町指定文化財　一心寺蔵
播隆による槍ヶ岳開山で使われたと伝わる大鉈(なた)

2-12 播隆上人作「鎗ヶ嶽絵図」　紙本彩色　軸装　個人蔵
播隆が天保6年(1834)2月に父親へ宛てた書簡に同封されていたものと伝わる
槍ヶ岳、穂高岳、焼岳周辺の山脈が墨で描かれ、松本を起点にして道筋が赤色で示され、梓川などの河川や池が青色で記されている。飛州新道の小倉や上高地の上口(かみぐち)湯屋、中山道の洗馬や本山宿といった地名も記されている。槍ヶ岳、穂高岳には「仏安置」と明記されている。播隆自身がこの絵図を描いたのか、あるいは誰かに描かせ文字だけ書き入れたのかなど詳細は定かではないが、いずれにしても播隆が作った絵図とされる。これとは別の同様に槍ヶ岳を描いた絵図がもう1点確認されている。

2-13 「鎗ヶ嶽壽命神」　軸装　個人蔵　松本市アルプス山岳館展示
天保5年(1834)、播隆は4回目の槍ヶ岳登山で、新たに持参した銅製の釈迦牟尼仏像を頂上の祠に納めた。先年、頂上に安置した3体の仏像にこの1体を加えたことで、それら四尊をもって槍ヶ岳寿命神(やりがたけじゅみょうじん)とした。
現在、同様の軸がほかに4幅確認され、いずれも長野県内にある。軸の字体は旧体で、「个」は「カ」あるいは「コ」と読み、現在では「ヶ」という表記が当て字として用いられる。上方中央に槍ヶ岳寿命神、下方右から南無文殊師利菩薩、南無釈迦牟尼如来、南無阿弥陀如来、南無観世音菩薩の四尊を配し、神仏が一体となった播隆独自の軸である。

2-14 播隆上人筆「三昧発得記」　軸装　天保5年(1834)　玄向寺蔵
播隆が槍ヶ岳から縦走し、笠ヶ岳で体験した御来迎(ブロッケン現象)について記したもの
天保5年(1834)の4回目の槍ヶ岳登山の際、播隆は播隆窟に53日間にわたって山籠(さんろう)し、天候の良いときにしばしば槍ヶ岳山頂へ参拝した。その間、播隆は槍ヶ岳の西鎌尾根から縦沢岳・双六池・大ノマ乗越・抜戸岳を経て笠ヶ岳まで縦走し、先年に安置した仏像を再見した。そこで幸運にも御来迎(ブロッケン現象)を目にし、その体験を綴ったものが播隆の「三昧発得記(さんまいほっとくき)」である。
三昧発得とは、念仏を唱えることだけに精神を集中させることで、求めなくてもおのずから仏や極楽浄土の世界を感じ見るという宗教的な思想にもとづいた体験をいう。もとは法然が「三昧発得記」として、自らのそうした体験を記している。
三昧発得記
去ル未ノ夏、飛州迦多賀嶽ヨリ遥ニ見エケレハ、一度参詣イタサハヤト思ヒ居タル鎗ケ嶽モ、宿縁ノ花開ケタル□開闢イタシ、亦鎗ノ穂先ヨリ深谷ヲ遥ニ隔チ、雲ニ聳ヒテ高々タル迦多賀嶽ヲ詠ムレハ、先年勧請ノ御仏モ在スニ、当山ヨリ直渡ニ再参イタサント思ヒ立テ向ヒケルニ、野口蒲田ノ谷ノ峰ノ取合、亦金木戸谷ノ水ホシ、鎗ニ続キシ峰十六ヲ越エ、草ヲ踏フセ、ハイ松ノシケキヲ分テ、迦多ノ尾ニツトフテ登リ、漸々七夕ノ前日申ノ半刻ニ至リテ、頂上仏前ニ拝礼ヲ遂、日没、西海ノ落日ヲ拝テ、四方ノ景色ヲ詠ムルニ、南方ノ空、眼上ニ光明耀キタマヒテ、阿弥陀仏御出現マシマセハ、未曾

有ノ心、難有拝礼ヲ遂奉テ、ツクヽ御尊容ヲ拝シ奉ルニ、其丈八九尺斗リ也、亦大円光ノ内輪ハ、白光色、中輪ハ一面紫光色ナリ、雲上ヲ照リ耀キタマフ金体ヲ拝シ奉り、亦如来ノ後ノ方ハ、谷深クシテ中尾村アリ、其此村ノ空上ニ、山巓ナリノ形ナル雲山アリ、其色ハ青黒キ色ナリ、其霊山高根ノ前ニアリテ立タマフ金体ノ、御足ノフシヨリ下モ雲ニ添トイヘトモ、千輻輪マテ明カニ拝シ奉テ、歓喜ニスキヌレハ、岩上ニ暫ク打伏シ、頭ヲアケテ見レハ、元ノ虚空トナリニケリ、

天保五午年八月　　念仏行者　播隆書之

2-15　ワラナワ　　参考展示　当館蔵

播隆は4回目の槍ヶ岳登山で善の綱（ぜんのつな）を設置した。「務台家文書」から推測すると、この綱は槍ヶ岳山頂付近に設置された藁（わら）製の太い縄で、木製の鈎（かぎ）を縄の所々に付けて岩壁に掛けたものと思われる。「念仏法語取雑録」（一心寺蔵）の鎗ヶ嶽仏縁安置之記には「其ノ鎗巌、直高百間許なり。内七十間ニ善ノ綱ヲ懸ケ、以テ老若ノ登山ニ便ヲ得シメントス」とあり、山頂直下から約127mの間に綱を設置している。その製作のためには多量の藁が必要とされ、播隆は信濃の野沢村庄屋の務台家宅（長野県南安曇郡三郷村温野沢）へ藁をもらいに訪ねたが、前年は凶作で藁の出来が悪かったので務台家では2年前のものを差し出している。

善の綱とは善所に導く綱という意味で、本尊御開帳などのときに結縁（けちえん）のため仏像の手などにかけ、参詣者などに引かせたり境内の回向柱（えこうばしら）と結んだりする綱で、五色の糸などを用いる。この綱や結ばれた回向柱に触れることは仏の御手に触れる行為であると信じられている。

2-16　播隆上人筆「和讃」　個人蔵

和讃（わさん）とは、経文の偈（げ・仏の徳や教えをほめたたえた四句でできている詩）を日本語に訳して五七調などで作られたもので、節を付けて朗唱する。古くは平安時代までさかのぼり、鎌倉時代には布教のために用いられ、広く民衆の間に流布された。今日に残る民謡や歌謡、演歌などの歌唱法に影響の形跡が見られ、日本の音楽に影響を与えたといわれる。

2-17　「子供教訓いろは和讃」　個人蔵

一行の頭が、いろは四十八文字ではじまる言葉で作られた和讃。

2-18　「信州鎗嶽畧縁起」　木版刷　天保7年（1837）　個人蔵

槍ヶ岳開山（縁起の中では開闢〔かいびゃく・天地の開けはじめという意味〕とされる）後、播隆がその由来を記した文を信濃国松本新橋（現長野県松本市新橋）の大坂屋佐助が木版刷にしたもの。槍ヶ岳への登拝者が安全に登れるようにと、槍の穂先の岩壁に取り付ける鉄鎖の資金を募るために、美濃・尾張・三河・信濃の四ヶ所で一般向けに配布された。海産物商の大坂屋佐助は、信濃において中田又重とともに熱心な播隆の信徒であり、播隆の槍ヶ岳登山にも同行している。常に念仏を唱えていたので佐助念仏とも呼ばれたという。

2-19　鉄札　　個人蔵

昭和30年代、槍ヶ岳山荘の従業員が遭難救助のために槍ヶ岳山頂付近に登った際、登山道から離れた岩壁の割れ目で見つけて持ち帰ったもの。銘文には「播隆上人奉（以下不明）」とあり、不明の字は「讃（あるいは賛）会」と推測される。昭和7年（1932）に播隆上人奉賛会（昭和6年に玄向寺・蟹江隆弁師の発起により結成）によって取り付けられた鉄鎖に付けられていたものと推測される。

3-1　『開山曉幡隆大和上行状略記』　　明治26年（1893）　棚橋智仙発行　正道院蔵

後世にまとめられた播隆の一代記。『行状記（ぎょうじょうき）』の略称で呼ばれる

『行状記』は播隆の巡錫に随従した直弟子・棚橋智暁が、播隆の死後に編纂を志したが、完成前に急逝したため、同門にあたる岡山隆応が漆間戒定に委嘱して脱稿した。播隆の一代を伝える記録としては、最も古いものである。当時、発行元の岐阜県大野郡小衣斐村（現岐阜県揖斐郡揖斐川町）を中心にして信徒に配布されたものと思われるが、現在は数冊のみが確認されるだけである。

3-2　『槍が嶽乃美観』　　明治39年（1906）　丸山文台・高島畔園・野本柴竹共著　高美書店発行　個人蔵

丸山文台・高島畔園・野本柴竹の共著として、松本の高美書店から発行されたもの。3人は志賀重昂の『日本風景論』などの影響を受けたようで、明治38年（1905）8月19日から3泊4日で槍ヶ岳登山を行い、その紀行文を書いた。同書に収録された一編である「槍が嶽の開祖播隆和尚略歴」は『行状記』からの引用がほとんどであるが、長野県南安曇郡三郷村や一心寺に残る資料からの考察も行なっている。

3-3　秩父宮殿下献上「播隆上人寫眞帖」　　祐泉寺蔵

昭和8年（1933）6月30日、岐阜県を訪問した秩父宮に献上したもの

秩父宮雍人（やすひと）は大正・昭和初期にヨーロッパ・アルプスや北アルプスなど国内の山岳で本格的な山登りを行ない、「山の殿下」と称される。山以外にも多くのスポーツを行い、それらに関する随想を発表した。現在、秩父宮記念スポーツ博物館（東京都新宿区霞ヶ丘、国立霞ヶ丘競技場内）にはゆかりの品々などが展示される。

3-4　『槍岳開祖 播隆』　　昭和38年（1963）　穂苅三寿雄著　新信州社発行　個人蔵

3-5　『槍ヶ岳開山 播隆』　　昭和57年（1982）　穂苅三寿雄・貞雄著　大修館書店発行　当館蔵

3-6　『槍ヶ岳開山 播隆［増訂版］』　　平成9年（1997）　穂苅三寿雄・貞雄著　大修館書店発行　当館蔵

3-7　一心寺蔵版木の刷物　一式　　個人蔵

3-8　播隆関係資料　一式　　個人蔵

3-9　ネットワーク播隆の会報誌『播隆研究』　　当館蔵

播隆研究を目的にする組織として平成11年（1999）発足した「ネットワーク播隆」（代表・黒野こうき氏）は発足以来、播隆研究の報告・発表会「播隆シンポジウム」を毎年開催し、播隆研究の会報誌『播隆研究』を発行（年1回）している。

播隆年譜

年　号	西暦	年齢	事　　項	備　　考
天明　6	1786	1	越中国新川郡河内村（現富山県上新川郡大山町河内）の中村佐右衛門（順信）の二男一女の次男に生まれる。生家は代々浄土宗の道場をつとめていた	天明7年（1787）、徳川家斉が第11代将軍となる。同年、老中に松平定信が任命される 寛政2年（1790）、幕府は大胆な諸政刷新を打ち出す（寛政の改革）。 ※同年、14の街道筋が廃止され、信濃・飛騨両国間は野麦峠通りのみとなる ※寛政4年（1792）、普寛が木曽御嶽山の王滝口から登拝路を開く 寛政5年（1793）、松平定信が老中を辞す ※享和元年（1801）、小蓮華山の大日如来が再祀される
文化　元	1804	19	尾張国の浄土宗・尋盛寺（名古屋市千種区城山）の性誉上人に弟子入り この頃、大和国（現奈良県）阿辺ヶ峰の見仏上人の弟子となり仏岩と称す（「行状記」）	文化元年（1804）、ロシア使節レザノフが長崎に来る
11	1814	29	江戸本所の霊山寺（東京都墨田区横川）で浄土宗の正式な僧となる	※文化13年（1816）、安曇野を横切る十か堰が開削される。同年、諏訪の延命が黒戸尾根から甲斐駒ヶ岳を開山する
文政　元	1818	33	この頃、山城国の一念寺（京都市伏見区下鳥羽）の蠍誉上人のもとで修行する 「諸宗皆祖念仏正義論」を書く	
3	1820	35	3月、大和国阿辺ヶ峰で見仏上人と再会する	※文政3年（1820）10月、信濃国安曇郡岩岡村（現長野県松本市梓川倭）庄屋の岩岡伴次郎（英総）によって飛州新道開削着工
4	1821	36	4月18日、「子育歌」を書く 8月21日、「女人之罪歌」を書く 飛騨国の杓子の岩屋（岐阜県高山市上宝町岩井戸）で90日間山籠修行する	
5	1822	37	1月2日、「無常歌」を書く 2月25日、「念仏講用議章」を書く	
6	1823	38	6月頃、初めて笠ヶ岳に登る 7月29日、笠ヶ岳への登山道を整備し登山 8月5日、御礼報謝のため村人18人とともに笠ヶ岳へ登り御来迎（ブロッケン現象）を拝す 8月22日、本覚寺（岐阜県高山市上宝町本郷）にて「迦多賀嶽再興記」を書く 南宮神社ならびに南宮山奥の院に参詣する	文化・文政期、富士講登山が最盛期となる。またこの頃、伊勢神宮などへの参詣、四国などへの巡礼、富士山などへの霊山登拝、京大坂や江戸見物などが民衆の間で盛行をみせる
7	1824	39	7月24日、飛騨国大野郡大萱村（現岐阜県高山市丹生川町大萱）の横山家に泊まる 7月25日、村人大勢にて恵比寿峠を越え折敷地へ見送る 8月5日、村人ら66人とともに4回目の笠ヶ岳登山、御来迎を拝す。登山道に道標の石仏、山頂に銅製の阿弥陀仏像を安置する 秋、美濃国の一宮南宮山奥の院（岐阜県垂井町南宮山）に山籠する 12月6日、母死去	※文政7年（1824）、夏までに飛州新道の上高地までの区間一部開通
8	1825	40	1月24日、播隆独自の「念仏起請文」を書き、施版・配布する 3月2日、「濃州一宮南宮奥院山籠記」を書く この頃、伊吹山の岩屋や草庵（播隆屋敷）で修行し、8月には阿弥陀如来像を安置する 文政8年から9年にかけて伊吹山およびその山麓に足跡あり（「川合区有文書」「奥田家文書」）	文政8年（1825）、外国船打払令が出される ※同年、美濃国川西地方で長森騒動、信濃国安曇地方で赤蓑騒動が起こる
文政　9	1826	41	4月8日、「念仏行道用議章」を書く 8月、信濃国安曇郡小倉村（現長野県南安曇郡三郷村）に中田又重を訪ね、その案内により1	

年　号	西暦	年齢	事　　項	備　　考
			回目の槍ヶ岳登山、初登頂する。開山に向け播隆窟に山籠修行する(「行状記」) 11月22日、母の三回忌に「追福之書」を生家に送る	
10	1827	42	6月24日、「念仏安心章」を書く 10月15日、「極楽歌」を書く	
11	1828	43	3月14日、尾張国の栄国寺(名古屋市中区橘)にて説法ならびに加持する 3月23日、尾張国の一行院(名古屋市中区大須)にて説法する 7月20日、2回目の槍ヶ岳登山。山頂に阿弥陀仏像ほか二体を安置して槍ヶ岳開山を成す 8月1日、穂高岳に六字名号碑を安置する 8月5日、「槍ヶ嶽仏縁安置之記」を書く 8月7日、「念仏融通百万称社由致」を書く 9月17日、同行4人とともに大萱村の横山家に泊まる	文政11年(1828)、シーボルト事件が起こる
12	1829	44	8月22日、「河内道場坊内並一家、親、村方、同行中迄被令二披露一候」を書く 12月25日、「岐阜廻行章」を書く	
天保　元	1830	45	天保年間初期(寺伝では元年)、美濃国に播隆開山の一心寺(岐阜県揖斐郡揖斐川町)が柴山氏らによって建立される	
2	1831	46	1月27日～2月5日、美濃国の来昌寺(岐阜県美濃市古川町)に招請される 12月20日、生家である川内道場の再興を覚証寺に許可される	
3	1832	47	9月、尾張国の栄国寺にて説法する	天保3年(1832)頃から同10年頃まで全国的な規模で不作となり飢饉が起こる(天保の大飢饉)。ピークは同7、8年
4	1833	48	8月、3回目の槍ヶ岳登山。播隆窟にて7日間の別時念仏、衰弱し下山途中に足を負傷、中田又重に背負われ下山する 信濃国の玄向寺(長野県松本市)で別時念仏	
5	1834	49	6月18日、四回目の槍ヶ岳登山。8月12日に下山する。その間、先に安置した三尊に新たに釈迦如来像を加えて四尊とし鎗ヶ嶽寿命神とする 7月6日、槍ヶ岳西鎌尾根から縦走し笠ヶ岳に登拝する。8月までに槍ヶ岳山頂付近に藁縄と木鈎で作った70間の善の綱を設置する 8月、「三昧発得記」を書く 8月12日、姉・さき病死 8月26日、信濃国安曇郡野沢村(現長野県南安曇郡三郷村)庄屋の務台景邦宅へ善の綱に提供してもらった藁のお礼に出向く 初冬、越前国の丸岡城下に巡錫し安楽寺(福井県丸岡町)に泊まり、護城山で冬安居する	
6	1835	50	2月4日、生家に手紙を書く 6月22日、野沢村の真元僧庵に招請される 6月24日、五回目の槍ヶ岳登山。下山は飛騨沢を下り飛騨国の蒲田に至る 閏7月25日、「親父正念往生祈願の為」を書き生家に送る 8月7日、弟子数人と大萱村の横山家に泊まる この頃、高山方面に招請され巡錫する 8月15日、父死去	※天保6年(1835)閏7月、飛州新道の上高地から中尾峠越え区間開削着工。同年8月20日、飛州新道全通し供用開始
天保　6	1835	50	10月3日、信濃国の鍋冠山中で冬期山籠用の小屋掛を図ったが大雪のため失敗、足の指2本を凍傷で失う	

年　号	西暦	年齢	事　　項	備　　考
			10月23日、信濃国安曇郡長尾村（現長野県南安曇郡三郷村）の阿弥陀堂に入り足を治療、越年し7月22日まで滞在する	
7	1836	51	4月、信濃国松本新橋の信徒・大坂屋佐助が「信州鎗嶽畧縁起」を施版・配布し、善の綱掛け替え用となる鉄鎖の資金を募る 鉄鎖で作られた善の綱が天保の飢饉のため松本藩に差し押さえられる 7月23日、長尾村の阿弥陀堂を去り美濃国へ向かう	
8	1837	52	8月、美濃国迫間邑山不動滝（現岐阜県関市迫間不動）で修行する	天保8年（1837）、徳川家慶が第12代将軍となる。同年、大塩平八郎の乱、生田万の乱が起こる
9	1838	53	2月6日、「川内道場縁起」を書く	
10	1839	54	3月24日～4月1日、美濃国の浄音寺（岐阜県可児市兼山）で授戒会の證明師を勤める 下総国の徳願寺（千葉県市川市本行徳）の徳順のもとで加行し浄土律宗和上となる	
11	1840	55	春、松本に巡錫する 7月、玄向寺で病気療養。槍ヶ岳への鉄鎖取り付けが許可される 8月、信徒らによって槍ヶ岳山頂に鉄鎖でできた善の綱が設置され大願成就する 9月8日、玄向寺から出立し各地を廻る 9月15日、野沢村の務台景邦宅に泊まる 9月16日、今井村に立ち寄り中山道を美濃国へと帰る 10月21日、中山道太田宿の太田脇本陣・林市左衛門宅（岐阜県美濃加茂市太田本町）で大往生する。行年55歳 法名「暁道播隆大律師」または「念蓮社仏誉仏岩唱阿弥陀仏播隆比丘」 墓碑は生家跡（富山県上新川郡大山町）、一心寺（岐阜県揖斐郡揖斐川町）、正道院（岐阜県岐阜市）、祐泉寺（岐阜県美濃加茂市）に建つ	天保12年（1841）、徳川家斉没す。同年、老中となった水野忠邦が諸政刷新（天保の改革） ※同年、飛州新道の徳本峠越えの冬道が改修 弘化元年（1844）、オランダ使節が幕府に開国を進言 嘉永6年（1853）、アメリカ特使ペリーが浦賀に来航 安政元年（1854）、日米親和条約締結 安政5年（1858）、日米修交通商条約調印 ※安政6年（1859）5月19日、大雨により飛州新道各所が崩落、通行不能となる ※文久元年（1861）8月、「新道切塞ぎ願書」提出によって飛州新道が閉鎖

（黒野こうき氏監修・市立大町山岳博物館作成）

注　年齢は数え年。備考欄には同時代の出来事から播隆と関わる主な事項を記した。
　　なお、※印は主に信濃における事項を記した。

この年譜は中山道みたけ館編『平成9年度中山道みたけ館特別展「槍ヶ岳開山　播隆上人の足跡展」』（御嶽町、1997）の「播隆上人年譜」および高山市上宝町ふるさと歴史館の展示パネル「播隆略年譜」の内容をもとに、美濃加茂市教育委員会文化課編『美濃加茂ふるさとファイルNo.7　播隆　槍ヶ岳を開山した念仏僧』（同課、1998）の「播隆略年譜」、穂苅三寿雄・貞雄著『槍ヶ岳開山播隆［増訂版］』（大修館書店、1997）の「播隆上人略年譜」、三郷村教育委員会「ふるさと三郷」編集委員会編『善の綱』（同教育委員会、1997）の「『善の綱』略年譜」より一部抜粋・引用し、加筆・訂正を加えて作成した。

主要参考文献

『開山曉幡隆大和上行状略記』(棚橋智仙、1893)

丸山文台・高島畔園・野本柴竹共著『槍が嶽乃美観』(高美書店、1906)

小島烏水著『日本アルプス』第2巻(前川文榮閣、1911)

那加村役場編『各務原今昔史』(那加村役場、1926)

大野光堂編『幡隆上人略歴』(幡隆上人奉讃會、1929)

淺見淵著『新民話叢書 槍ヶ岳の鐵くさり』(翼賛出版、1944)

柳宋悦著『南無阿弥陀佛』(大法輪閣、1955)

穂苅三寿雄著『槍岳開祖 播隆』(新信州社、1963)

安田成隆著『山岳佛教 念佛行者播隆上人』(安田成隆、1970)

岩間正夫編『世界山岳百科事典』(山と溪谷社、1971)

中村周一郎著『北アルプス開発誌 山小屋創始者と山案内人烈伝』(郷土出版社、1981)

横山篤美著『上高地物語』第1・2部(信州の旅社、1981・1982)

穂苅三寿雄・貞雄著『槍ヶ岳開山 播隆』(大修館書店、1982)

信濃毎日新聞社編『信州山岳百科Ⅰ』(信濃毎日新聞社、1983)

中島正文著『北アルプスの史的研究』(桂書房、1986)

山崎安治著『新稿 日本登山史』(白水社、1986)

建設省国土地理院編『日本の山岳標高一覧 ―1003山―』(建設省国土地理院、1991)

布川欣一著『山道具が語る日本登山史』(山と溪谷社、1991)

黒野こうき著『風たより』No.104(二月社、1997)

中山道みたけ館編『平成9年度中山道みたけ館特別展「槍ヶ岳開山 播隆上人の足跡展」』(御嵩町、1997)

穂苅三寿雄・貞雄著『槍ヶ岳開山 播隆[増訂版]』(大修館書店、1997)

三郷村教育委員会「ふるさと三郷」編集委員会編『善の綱』(三郷村教育委員会、1997)

安曇村誌編纂委員会編『安曇村誌』第3巻 歴史 上・下(安曇村、1998)

『別冊太陽』No.103「人はなぜ山に登るのか 日本山岳人物誌」(平凡社、1998)

『飛騨新道と有敬舎 岩岡家三代の足跡』(岩岡弘明、1998)

美濃加茂市教育委員会文化課編『美濃加茂ふるさとファイル』
No.7「播隆 槍ヶ岳を開山した念仏僧」(美濃加茂市教育委員会文化課、1998)

揖斐川町歴史民俗資料館編『平成15年度特別企画展 ばんりゅうさん 播隆上人と一心寺』
(揖斐川町歴史民俗資料館、2003)

ネットワーク播隆編「ネットワーク播隆」通信『ばんりゅう』No.3～5(ネットワーク播隆、2001～2002)

ネットワーク播隆編「ネットワーク播隆」通信『ばんりゅう』No.7(ネットワーク播隆、2003)

ネットワーク播隆編『播隆研究』第1～5号(ネットワーク播隆、2000～2004)

ネットワーク播隆編「ネットワーク播隆」通信『ばんりゅう』No.9～11(ネットワーク播隆、2004～2005)

謝　　辞

企画展開催にあたり、下記の個人・団体の皆様ならび関係機関から、貴重な資料のご出品をはじめ、写真撮影や資料調査など多大なご協力・ご教示を賜りました。ここにご芳名を記して心より深く感謝の意を表すとともに、厚くお礼申しあげます。

石井玄太　一心寺　揖斐川町教育委員会　揖斐川町歴史民俗資料館
大作一男　大澤法我　大町市文化財センター　荻須眞教　小原稔　上宝ふるさと歴史館
川上岩男　北野茂時　黒野こうき　玄向寺　酒井信夫　正道院
信越放送ライブラリー事業部　鈴木唯司　高山市役所上宝支所教育振興課
竹中純瑜　田代深志　中村俊久　中本祐・日本浮世絵博物館
布川欣一　ネットワーク播隆　播隆上人生家の会　降旗正幸　法蔵寺　穂苅貞雄
本覚寺　松本市アルプス山岳館　松本市立博物館　無縁寺　百瀬献
祐泉寺　安田真成　龍山大耕（五十音順、敬称略）

播隆・槍への道程　―善の綱をたどれば―

発　行　日　2005年6月4日発行
監　　修　黒野こうき
発行　編集　市立大町山岳博物館
〒398-0002　長野県大町市大町8056-1
TEL：0261-22-0211／FAX：0261-21-2133
E-mail：sanpaku@city.omachi.nagano.jp
印刷・製本　㈱奥村印刷
〒398-0002　長野県大町市大町2470
TEL：0261-22-0205／FAX：0261-22-1345

(C) Omachi Alpine Museum 2005 Printed in Japan

槽隆

市立大町山岳博物館

〒398-0002 長野県大町市大町8056-1
TEL：0261-22-0211／FAX：0261-21-2133
E-mail：sanpaku@city.omachi.nagano.jp

2005